

Title	北部ヴェトナム銅鼓をめぐる民族史的視点からの理解
Author(s)	西村, 昌也
Citation	東南アジア研究 (2008), 46(1): 3-32
Issue Date	2008-06-30
URL	http://hdl.handle.net/2433/66914
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

北部ヴェトナム銅鼓をめぐる民族史的視点からの理解

西村昌也*

The Bronze Drums of Northern Vietnam as Seen from the Perspectives of Ethnohistory

NISHIMURA Masanari*

Recent progress in the data collection and typological classification of bronze drums of northern Vietnam and its surroundings have made it possible to recognize the geographical distribution and chronology of bronze drum types (Pre-Heger I to Heger IV). All types show a limited distribution range and some have been played an important role as a ritual or prestige good in several ethnic societies. Therefore, combining archaeological advances with ethnography, historical documentation, and legend can provide a key to understanding the formation of present-day ethnic groups. The Heger I type of Dong Son tradition drums (2nd century BC to 1st century BC), which were cast in the local Dong Son cultural sphere, are almost all concentrated on the hilly area and lower plains to the south of the Red River. Furthermore, the distribution of the later Heger II type (3–4th to 8–9th century AD) and Pseudo Heger II type (11th to 15–16th century AD), some of which are still used by the Muong ethnic group, overlaps with the distribution of the former type in the mountain range. Heger II were cast in Guangxi and Pseudo Heger II were very possibly cast in the Thang Long or surrounding lowland area of the Red River Plain on behalf of mountainous ethnic groups. Although the area and people that produced bronze drums were changed in its long history, the people that used the drums remained the same in the Northern Vietnam. Furthermore, while the Viet-Muong ethnic group have a long-term tradition of using bronze drums, the Thai and Tay, the major Thai ethno-linguistic groups of northern Vietnam, have not retained such a continuous tradition. This is one contrast between the Thai/Tay and Viet/Muong groups. Another ethnic group that has retained a long term tradition of bronze drum usage is the Lo Lo (Tibet-Burma) of the northernmost area of Vietnam.

Keywords: Bronze drum, Northern Vietnam, Ethnohistory, Muong, Thai, Lo Lo
キーワード：銅鼓，北部ヴェトナム，民族史，ムオン族，タイ系民族，ロロ族

* 関西大学文化交渉学教育研究拠点； Institute for Cultural Interaction Studies, Kansai University, 3-3-35 Yamate-cho, Suita-shi, Osaka 564-8680, Japan

I はじめに

北部ヴェトナム、雲南、広西にまたがる地域は、銅鼓がその出現初期から現在まで連綿と使われ続けてきた地域である。現民族文化における儀器としての重要性やその個性的形象ゆえに、東南アジア文化を代表する器物として扱われ、現代の民族文化あるいは国家のシンボリックモチーフや表象として頻用されている。

銅鼓の研究は、ヘーガー [Heger 1902] の分類学的研究（ヘーガー I 式からIV式：以下文中ヘーガーは省略）を嚆矢に、先史時代に遡る I 式銅鼓などを中心に、考古学研究が型式分類や編年の詳細を築き上げてきた。しかし、その文字資料の言及例、豊富な民族例の存在から、早くから考古学者のみならず、歴史学・民族学・美術史の研究者らも積極的な研究発言を行ってきており、東南アジアの代表的な物質文化として、学際的研究が行われてきた。また、日本での研究史も厚く [Yoshikai 2004]、初期稲作社会の弥生文化で用いられ、類似した性質をもつ銅鐸との対照・比較研究も行われてきた [鳥居 1923; 森 1981; 寺沢 1992a; 1992b; Imamura 1996]。文化的脈絡での比較は重要であるが、銅鼓は先史時代末期から現在まで使われ続けているのに対して、銅鐸は、ほぼ弥生時代のみに使われた違いに注意しなくてはならない。その違いの説明として提出されたのが、「銅鼓（伝統）の柔軟性」[吉開 1998: 215] である。

また、その特徴的の器形かつシンボリックな性質をもつ銅鼓が、国境をまたいで分布するにもかかわらず、その解釈において、一国史あるいは一地域史的な枠組みに囚われ、民族的・地域的主観を反映させやすいことにも留意しなくてはならない（今村 [1996] 参照）。ヴェトナムの Ngoc Lũ 鼓などの A 1 類を最古の銅鼓に位置づけ、先 I 式をより後の時代に位置づける考え [Phạm M. H. *et al.* 1987; Phạm H. T. *et al.* 1990] やヴェトナムの II 式銅鼓（吉開分類の類 II 式）と I 式銅鼓に年代的重なりを期待する考え [Trinh S. 2003]、広西の北流型銅鼓を銅鼓初現期に位置づける編年案 [洪 1974] などがこれに相当するといえよう。つまり、国境間をまたいで客観的に銅鼓を評価する視点が必要で、近年の日本の銅鼓研究例 [今村 1992; 吉開 1995; 1998; 1999; 2000] は、その模範例といえよう。当然銅鼓を利用する社会の歴史研究においても、国境にこだわらない視点が必要である（例：吉開 [2002]）。

本論の主たる論述域の北部ヴェトナム（図 1）では、銅鼓はフランス植民地時代に本格的収集・研究 [Parmentier 1918; 1932] が開始され、ドンソン遺跡で墓葬に共伴することが発掘で確認され、先史時代以来の器物としての認識が確定した [Goloubew 1929; Janse 1947]。また、ムオン族の銅鼓利用習俗からドンソン文化とのつながりを探る試みもこのときにすでに始まっている [Goloubew 1937]。独立後も、ヴェトナム考古学は、I 式や II 式銅鼓（後述の類 II 式鼓）の遺跡での共伴例を明らかにし、さらには各民族の利用例なども報告するようになる。そのな

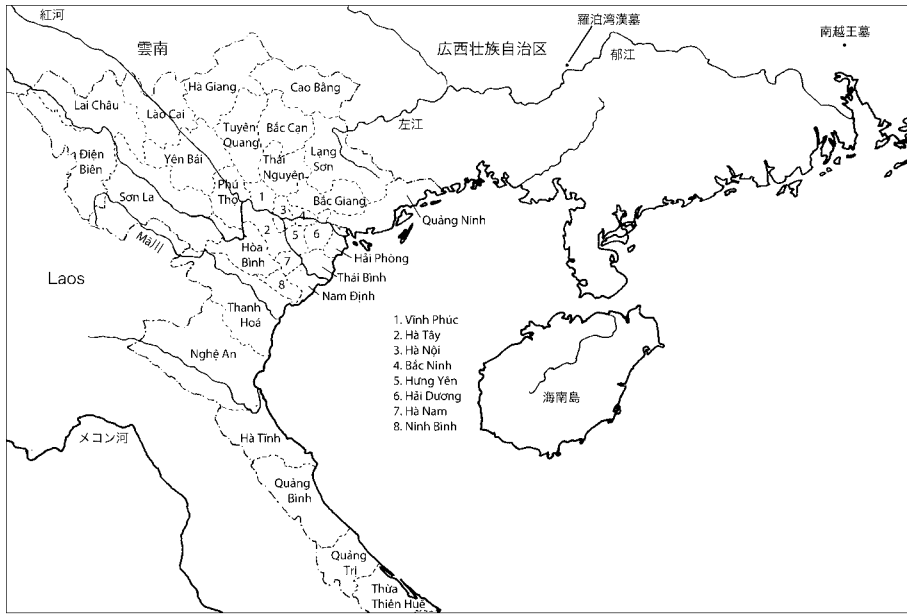


図1 北部ヴェトナム行政区分図

かで民族学的研究や歴史資料などを併用して進める研究が Diệp Đ. H. [2003] らを中心に、早くから進められていた。特に最も発見例の多いヴェトナムのⅡ式銅鼓（後述の類Ⅱ式鼓）に関しては、ムオン族（モン・クメール語族）、ひいてはキン族（現ヴェトナム人の主要民族）とムオン族の分化といった歴史民族学的関心から論じられてきた [Nguyễn T. T. 1985; Phạm Q. Q. 1985]。

そして、1987年に出版された Trống Đông Sơn [Phạm M. H. *et al.* 1987] は、Ⅰ式銅鼓をヴェトナム例のみならず、東南アジア・南中国例も対象にして型式・編年学的に集大成をした意欲作で、型式学的に問題はあるものの、東南アジア全体での脈略で銅鼓を集大成し、研究史的沿革などを明らかにし、さらに用途や機能などに論議を広げたことにおいて評価されるべき大きな業績である。

また、近年はⅠ式や類Ⅱ式銅鼓を中心に各省でのデータ集成や新しい分類研究も試みられている [Nguyễn A. T. 2001; Trịnh S. and Nguyễn A. T. 2001; Trịnh S. and Quách V. A. 2002; Quách V. A. 2003; Đỗ N. C. 2003; Phạm M. H. in press; Phạm Đ. M. 2005]。

これまでの研究を俯瞰して指摘できることは、分類・編年研究の進展により時間軸上に、各銅鼓型式を正確に位置づけられるようになり、空間軸上の分布変化も理解しやすくなった。例えば、吉開 [1998] の広西での研究成果は、その典型である。その反面、正確な時間軸を反映させて、銅鼓の生産、使用、流通の様々な文化・歴史的側面を明らかにする研究がまだ不十分

である。また中国では進みつつある、文献資料や伝承資料に登場する銅鼓と実際の銅鼓資料をどのように重ね合わせて理解するかという問題も残されている（市原 [1989]、蔣 [1999] など参照）。さらには、そうした研究に基づいて地域史や民族形成史において銅鼓が果たした役割を明らかにしていく必要がある。

本論は、東南アジアにおける銅鼓分布の一大中心地である北部ヴェトナムを対象に、2005年までに北部ヴェトナムで出土確認された銅鼓について、作成したデータベース [西村・西野 n. d.] に基づく考察である。先史時代から現民族例の銅鼓までを幅広く対象とし、時期別の空間的分布から考察できる生産地や使用者をめぐる文化的脈略や文献資料との対照を論じ、民族形成史上の問題に言及する。

なお本論では、ヘーガー分類（I式～IV式）を基本として、銅鼓の発生から現在までを、進化系統論的に論じてきた編年研究 [今村 1973; 1992; 吉開 1998] を時間軸画定の主軸に据え、一部、補完が必要なときに限って、編年議論を局地的に行う。¹⁾ なお、本論でふれる主な銅鼓形式代表例とその年代は図2と表1にまとめてある。

表1 ヴェトナム、中国、日本研究者分類対照

ヘーガー分類		I式				II式		III式		IV式	
吉開分類		I式前期	I式中期	I式後期		II式	類II式				
今村分類	先I式	I式 石塞山系	I式ドン ソン系 1a-2a期	I式ドン ソン系 2b-3a期	I式ドン ソン系 3b期						
中国分類	万家霸型	石塞山型	石塞山型	石塞山型	石塞山型	北流型 靈山型		西盟型	遵義型	麻江型	
ヴェトナム分類	I式 D型	I式A- IV型、 B-III	I式A-Is II, III, B- I, II, C- I, II型	I式 C-I, II, IV	I式 D型	II式	II式	III式	I-IV式		IV式 ライドン 式
年代幅	BC5- BC4 世紀	BC3- BC2 世紀	BC3/2- AD1 世紀	AD2 世紀	3世紀 以降	3/4-9 世紀	11- 15/16 世紀	9/ 10-20 世紀	10-13 世紀	14-17 世紀	19世紀

1) 本論は、これまで提出されてきた銅鼓分類研究を詳論することを目的としてはいない。ヴェトナムや南中国の銅鼓分類に関しては、Heger [1902]、今村 [1973; 1992]、洪 [1974]、中国古代銅鼓研究会 [1988]、Phạm M. H. *et al.* [1987]、俵 [1995]、吉開 [1998]、蔣 [1999] などの研究を参照する必要がある。

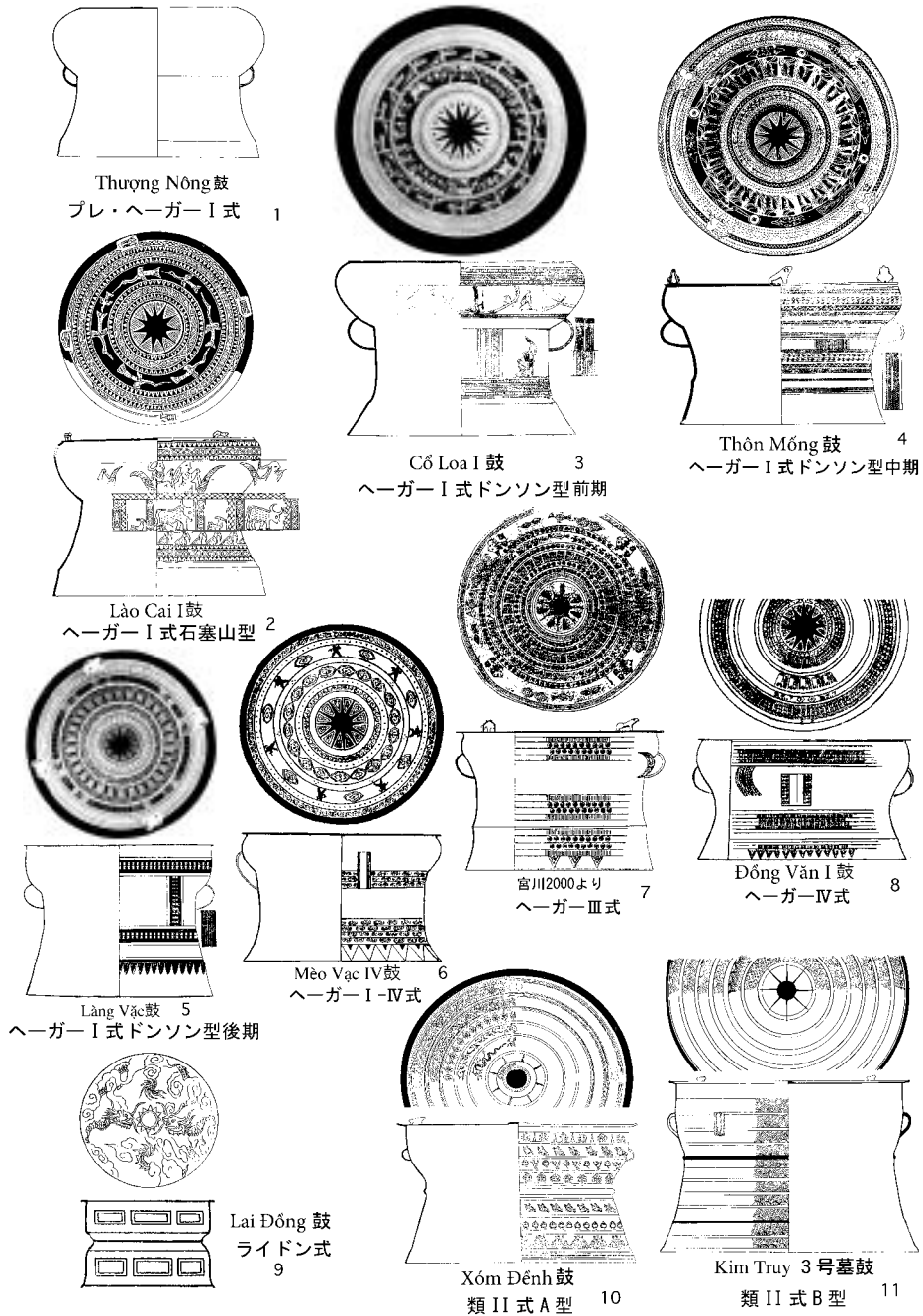


図2 各銅鼓形式(縮尺不同)

図版出典 No. 1: [VBTL SVN 1975], No. 2: [Phạm M. H. 1997], No. 3: [Phạm H. T. et al. 1990], No. 4, 5: [Phạm M. H. et al. 1987] No. 6, 8: [Nguyễn K. S. et al. 2000], No. 7: [宮川2000], No. 9: [Trịnh S. and Nguyễn A. T. 2001], No. 10: [Quách V. A. 2003], No. 11: [Phạm Q. Q. 1993]

II 北部ヴェトナム銅鼓の分布・性格・歴史的位置づけの変化

II-1 先I式とI式石塞山系

ヘーガーI式に先行する先I式〔今村1973〕とそれに後続するI式石塞山系銅鼓は、紀元前5-3世紀頃の出現期のものである。北部ヴェトナム平原部では、地域的限定性をあまり見せずに疎らに出土している(図3)。ただし、ラオカイ(Lào Cai)省ラオカイ市で近年大量に出土した銅鼓の中〔Phạm M. H. 1997〕に、今村〔1992:115-116〕の論じる石塞山系からドンソン系へ移行する中間的なものを含む当該期の銅鼓が多く存在する。ラオカイ省やより西の雲南側には銅鉞山が存在し、北部ヴェトナムへの銅資源供給源になっている可能性もあり、ラオカイでの大量な銅鼓出土も理解されやすい。また、ヴェトナム最北のハザン(Hà Giang)省から国境を雲南側に越えた文山壮族苗族自治州でも、先I式やI式石塞山系が大量に出土しており〔王

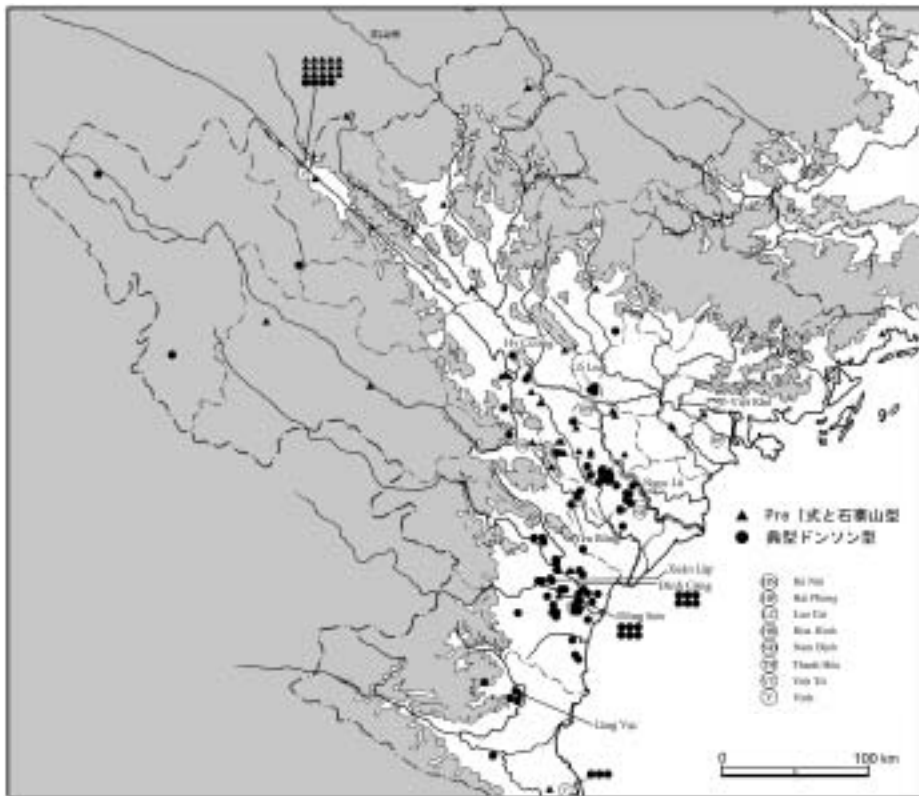


図3 北部ヴェトナム紀元前3世紀から紀元前1世紀頃の銅鼓分布

2005; 陳 2005], 東南アジア大陸部全体を俯瞰した場合での分布中心も、広西、雲南、ヴェトナムの国境隣接地域周辺に収束しつつあり、当該期の銅鼓一大生産地を表しているのであろう。²⁾ 今後、紅河平原やタイホンア省低地のドンソン文化とどのような文化的親和関係や時間的序列に位置づけられるかを詳細に検討する必要がある。

ハイフォン省の Việt Khê 墓葬例 [VBTL SVN 1968] では、豊富な副葬品と共に銅鼓が出土し、ラオカイ出土例も墓葬の副葬品と考えられることから、すでに銅鼓が富裕者の副葬品として重要であったことが理解できる。

II-2 I 式ドンソン系前期

今村分類の 1 期から 2a 期までを対象とするもので、紀元前 3 世紀から 1 世紀頃と考えられ、分布に偏りがある (図 3)。紅河本流で北部と南部で分割した場合、そのほとんどは南部の平原部から中遊域に集中している、コーロア出土例などわずかな例以外、ほとんどが紅河本流より南に分布している。前時期の石塞山系銅鼓が紅河平原全域で確認されるのとは対照的である。また、同時期に盛んに製作されるミニチュア銅鼓の分布も同様である。これらの銅鼓の大半は、文様などの共通性から、ドンソン文化青銅器が製作された紅河平原南域からタインホアの平野部で製作されたことは間違いあるまい。そして、これらの銅鼓は、さらに中南部ヴェトナム、島嶼部も含めた他の東南アジア諸国にも広く分布している。

Đông Sơn 遺跡 (ドンソン: Thanh Hóa 省 [Janse 1947]) や Làng Vạc 遺跡 (ランヴァック: ゲアン省 [Phạm M. H. 1982]) では大型集団墓地で銅鼓が複数例、副葬品として出土している。また、墓葬間で副葬品の内容や数量等に優劣が生じており、階層化社会が形成されていたことが理解できる。同じく、Yên Bồng (ホアビン省) や Đình Công (ディンコン) や Xuân Lập (スアンラップ: タインホア省) のように、ほぼ同時期のものが複数出土している地点がある。Yên Bồng III 鼓の場合、今村編年の 2a 期 (紀元前 1 世紀頃) に比定できるが、紀元 2 世紀の印紋陶と共伴して発見されており (ホアビン省博物館筆者確認資料)、墓葬からの出土例と推定される。この場合、ドンソン文化集団が、銅鼓を一定期間使用・伝世した後に墓葬に埋めたことを考えなくてはならない。紀元 2 世紀という社会状況から判断するなら、埋納には平野部からの漢化の圧力が主理由であろう。いずれにしても、このような銅鼓複数出土地点は、山間部と平野部の移行地域に多く立地しており、漢王朝による侵略以前の初期国家形成期にあったドンソン文化社会の各地域中心と考えたい。文献資料では『水経注』引用の『交州外域記』が記す「雒王、雒侯、雒将」、『史記索隠』引用の『広州記』が記す駱王、駱侯、駱将が、当時の社会の支配層に相当する。

2) しかし、今村 [1976] が指摘したように、タイ発見の失蠟法による鑄造例があり、中心域以外での生産例も確実に存在する。

ところで、当該期の銅鼓には画文帯を有す巨大銅鼓（図4-2, 3: Ngoc Lũ 鼓をはじめ, Cỏ Loa I 鼓, Hồng Hà 鼓, Đà 川鼓など）があり、紅河本流沿いに出土している。画文帯には、船人文や家屋文が描かれており、そのなかには銅鼓を並べて楽器的に使っている儀礼風景が描写されており、彼らの社会の中で銅鼓の位置がよく理解できる。Ngoc Lũ 鼓（図4-3）〔VBTL SVN 1975: 171〕の場合、側面上部に同様な鳥人と船の文様があり、武器を抱えていることから戦に行く風景と考えられるが、船体中央部あるいは後方に位置する船楼のなかには銅鼓が置かれている。

対照をなす例が、中国広州市の南越国第2代王であった趙昧の墓（紀元前122年頃）から出土した9点の桶型青銅器出土例である。そのなかには、鳥人と船を文様（図4-1）に持つものがあり、各文様がドンソン銅鼓と共通し、北部ヴェトナム北域あるいは嶺南地域西部で製作されたと考えられている〔吉開 1996: 140-141; 西村 2001b: 378-380〕。この船人文を報告者〔麦 他 1996: 124-126〕は戦士たちが戦争に行き、勝利による戦獲を得て、凱旋して帰る光景を描写していると考えている。凱旋する船の上には、首級や捕虜とともに、戦士が銅鼓の上に腰掛けている姿がある。そして、戦士が銅鼓に腰掛けていることに注目し、これは勝利者側が使う祭礼具ではなく、戦利品であると推測している。銅鼓は船楼外か船倉に置かれ、船楼内には脚付きの壺（銅壺ではないか）が置かれており、銅鼓に対する扱いの違いが際だっている。

両図像の違いから、ドンソン文化系の青銅器を製作した集団の中にも、銅鼓が戦利品や威信

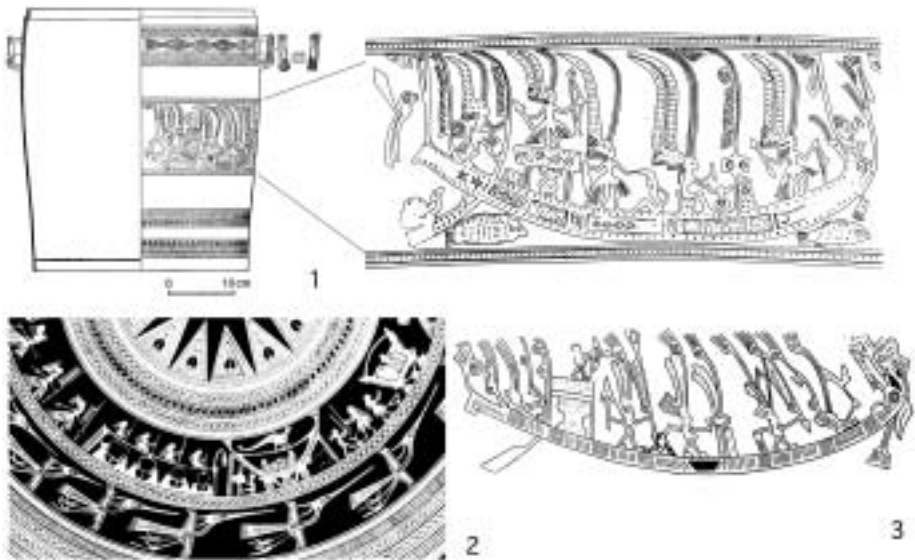


図4 1：広州南越王墓出土バケツ型青銅器 2：Cỏ Loa I 鼓の鼓面文様
3：Ngoc Lũ I 鼓の頭部文様

財的对象でしかなかった集団（南越王墓埋納の桶形銅器製作集団）と祭器の中心として利用する集団（Ngọc Lũ 鼓や Cổ Loa 鼓を製作した集団）といった違いが理解でき、それは前者が紅河より北域、後者が紅河本流域かあるいは南域といった空間領域の違いになっている可能性が高い〔西村 2001b; 2006; Nishimura in press〕。現在、ヴェトナム考古学では、漫然と北部ヴェトナム全体をドンソン文化の領域として捉えているが、銅鼓の分布域と銅鼓利用に対する差異を考慮するなら、ドンソン文化の領域は、再考しなくてはならない。この問題は後述するが、ここではヘーガー I 式ドンソン系前期の場合、銅鼓を頂点とする青銅器体系を有す考古学的遺物群を典型的なドンソン文化とし、その分布域は紅河本流以南からゲアン省までの範囲に相当し、過去に議論されてきた空間（例：Hà V. T. [1994: 260-273]）より狭めて定義しておきたい。

ところで、馬援は徴姉妹の起義（紀元 40-43 年）を鎮圧した後に、在地社会で使われていた銅鼓を集めて、鑄つぶして「馬式」を鑄造しており〔『後漢書・馬援伝』〕、この事件は当該銅鼓生産期の後半に起きていることになる。銅鼓の在地社会での重要な役割を理解した上で、それを文化・象徴的に抹殺しようとした例であろう。

また、管見では広西側でも石塞山型の銅鼓は若干例分布するが、後続するドンソン型前期（I 式前期銅鼓群）銅鼓は、西林普駝銅鼓古墓例〔広西壮族自治区文物工作隊 1978b〕と漢墓から出土した貴県貴港高中鼓（鼓土 1011）〔黃増慶 1956〕のみで、その分布偏在状況については、今村〔1992〕や吉開〔1998〕が指摘している。また、近年の鉛同位体分析研究で、貴県貴港高中鼓は見事にヴェトナムのドンソン銅鼓群のなかに納まっている〔万 他 2003〕。そして、西林普駝銅鼓古墓が雲南省境に近い広西西北部の出土であることを考慮すると、広西の中心部では I 式前期銅鼓群並行期には銅鼓を生産して使う在地の民族がほとんどいなかったことになり、紅河以北のヴェトナム最北域の現象と連動していることがわかる。³⁾

II-3 I 式ドンソン系中期

今村編年の 2b 期と 3a 期、吉開編年の I 式中期に相当する（具体年代については以下参照）。分布は紅河平原域内ではなく辺縁部が中心となる（図 5）。

バックニン省ドゥオン川南岸のルンケー城址（通称：羸隴城 Thuận Thành 県）は、およそ紀元 2 世紀から 5～6 世紀にわたって交趾郡（紅河平原域）の中心地（郡治所在地）として機能した龍編（Long Biên）城と同定される巨大な城址である〔西村 2001a; Nishimura 2005〕。

3) この紅河以北から広西にかけての銅鼓分布空白に関しては、秦や南越の侵略や支配浸透により銅鼓が利用されなくなったという仮説も可能ではある。しかし、南越王墓や南越の高級官吏の墓である貴県羅泊灣墓の典型的な南越型青銅器を伴出する青銅器組成〔黄 1993〕とは異なり、ドンソン文化の青銅器に近い在地的な青銅器を伴出する遺跡もある〔広西壮族自治区文物工作隊 1978a〕。また、ヴェトナム側でも南越式の青銅器と判断できる青銅器の出土は極めて限られていることから、BC 3 世紀末から 2 世紀後半にかけて、北部ヴェトナム北域や広西などに銅鼓を含まない在地の青銅器群を有す文化が存在したことを想定するのは可能と判断する。

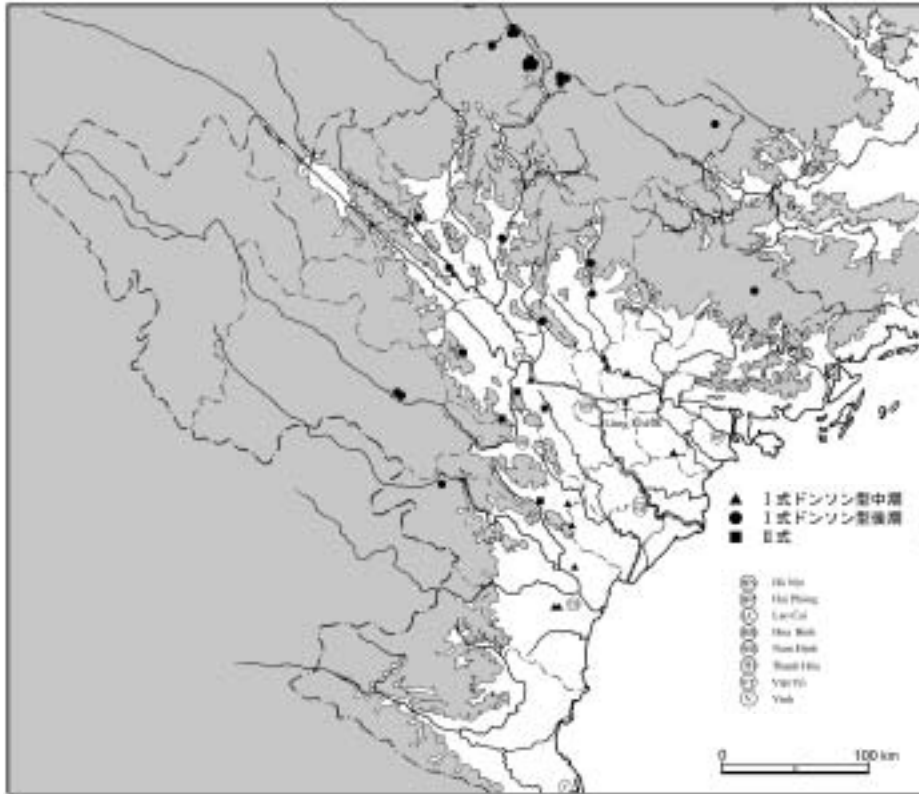


図5 北部ヴェトナム紀元前2世紀から10世紀頃の銅鼓分布

1998年11月に城郭内でレンガ工場の土採掘坑の排土よりI式銅鼓の鋳型片が発見され、さらに2001年の4-5月の発掘調査でも、城壁の盛り土から全く同類の鋳型小片が出土した〔西村2001a〕。1998年発見例の残存する鋳造面には、弧の中心から外側に向かって、複段の櫛歯文、複段の接線二重円文、櫛歯文、米粒のような点文、さらに圏線が順に、スタンプ技法を中心に凹文で施文されており、鼓面外縁部の鋳造面であることがわかる。外側の圏線をもとに直径を算出すると50-55cm程で、I式としては中型の部類である。問題はこの鋳型と類似した銅鼓である。全く同じ文様配置の出土例はないが、文様構成を重視すればPhú Phương I鼓（ハートタイ省Ba Vi県）に類似している。スタンプ技法と接線円文を重視すれば、Đác Glao鼓（中部高原コンツム省）に類似している。明確なスタンプの多用ということを基準とすれば、Đác Glao鼓により類似している。Phú Phương I鼓は今村〔1992〕編年の2b期、吉開分類のI式中期西群、Đác Glao鼓は今村編年の3a期、吉開分類のI式中期東群となる。城壁形成層での鋳型片は、考古学的出土状況と土器の編年研究から、年代の下限が紀元2世紀後半に納まるこ

と判断される〔西村 印刷中〕。従って、I 式ドンソン系中期の具体的年代幅は紀元 2 世紀を中心と考えるのが妥当であろう。

当該期の銅鼓の分布は決して紅河平原の中心部には存在せず、むしろその外縁に位置することである(図 5)。今村編年 2 b 期に分類される Quế Tân, Bắc Lý, Hư Chung, Xuân Giang 鼓のみが紅河平原の比較的中心部での出土である。しかし、このうち唯一出土地点の情報が存在する Bắc Lý 鼓〔Phạm M. H. *et al.* 1987: 100〕に関しては、磚室墓が確認されている丘からの出土であり、ドンソン文化系遺跡からの出土ではない可能性が高い。そして残りは紅河本流より南の山間中遊域から出土している。当該期例の場合、在地ドンソン系文化の脈略での出土と平野部に入植しつつあった漢系文化の脈略での出土両方を考える必要があろう。また、漢系銅洗とドンソン銅鼓文様が合わさって成立したドンソン系洗の最初期例で、上記銅鼓に時期的にも近接する例が磚室墓(Quảng Ninh 省ハロン湾の Đá Bạc 墓)から出土している〔吉開 1995: 64-94〕。

また、今村編年 3 a 期例は、さらに周縁からの出土となる。Đắc Glao 鼓(Đắc Lak 省)、Thôn Mống 鼓(ニンビン省)、An Trung 鼓〔西村・ファン 2008〕などが挙げられる。また、ラオス南部のチャンパサック域出土例やメコン本流域のタイ側のウボンラチャターニー県出土例〔新田 2000〕、ビンディン省の Gò Rộng 鼓などは、当該期の銅鼓をモデルにして地元で鍛造した可能性の高い例と判断される〔西村・ファン 2008〕。

これらの分布は、以前のドンソン文化の銅鼓が、紅河平原西域・南域からゲアン省の山間部から平野部にかけて密に分布しているのとは極めて対照的である。ルンケー城銅鼓鋳型例は、士燮などの時の権力者が居住した交趾郡太守の居城内で、銅鼓鍛造が行われていたことを示している。中国系、あるいは紅河デルタ在地の集団のいずれが、銅鼓を造っていたかという問題は別にして、ルンケー城政権が銅鼓を青銅器工房の一角で生産し、それらが紅河平原域の外域あるいはさらなる遠隔地の異質(おそらく異民族的)な集団にもたらされるようなシステムがあったことになる〔西村 2001a; 2001b〕。この時期、銅鼓使用者と製作者は完全に異っていたと考えられ、紀元 1 世紀頃まで、ドンソン文化の在地的脈略で製作された銅鼓とは性質的に異なると考えてよい。羽人文などの銅鼓と共通する文様を有すドンソン系銅盃〔吉開 1995〕と共に、その果たした役割は当時の漢系集団と紅河平原やその周縁の在地系集団との相互関係で理解しなければならないものであろう。

II-4 I 式後期

吉開分類の I 式後期銅鼓(前半部は今村編年の 3 b 期に対応)は、I 式鼓のなかで唯一紅河平原より北域を主に分布し(図 5)、その分布中心は広西の鬱江流域にある。3 世紀から 9 世紀位までの年代幅が想定されている。

ヴィンフック省のĐao Trù 鼓 [Hoàng X. C. 2000] などは、鉄やスズなどの鉱物資源分布域のなかで出土しており、金属資源開発者と銅鼓製作者や使用者の関係を見逃してはなるまい。

II-5 II式

フート省、ハータイ (Hà Tây) 省、ホアビン省などの山間地域あるいは山間地域と平野地域の間接地帯で出土しているが、非常に数は少ない (図5) [吉開 1998; 西村・西野 2003]。これらは3~9世紀に広西で製作されたものと考えられており [吉開 1998]、当時、紅河平原域などを支配していた歴代中国政権が広西産銅鼓移入の仲介になったのか、あるいは海か山間部を介した非漢民族ルートによる入手であったかが問題となる。II式は、海南島でも出土していることから、海経由のルートも十分可能性がある。文献資料では、5世紀頃に成立した『林邑記』を引用する形で、『水経注』巻36に銅鼓を冠した地名が紅河平原の南あるいはタインホアの平野部にあることが言及されており、銅鼓自体は、I式の盛行期後も認識されていたことが示されている。

II-6 類II式

この形式の銅鼓は非常に限られた分布を示す。つまり、ホアビン省、フート省西側、ニンビン省、タインホア省やゲアン省の山間部、ソンラー (Son La) 省南部、ハータイ省西部など、ホアビン山塊を中心とした山岳域である。それ以外に若干数、飛び地的にハザン (Hà Giang) 省、雲南のヴェトナム国境隣接域、ヴェトナム中部とラオスに分布しているのみである (図6)。類II式鼓の分布中心域はムオン族の分布域 (図7) と重なり、ムオン族の首領の家などに伝承されていたことが各調査で明らかにされている [Cuisinier 1946; Quách V. A. 2003]。筆者も実際、類II式鼓が、ムオン族の族長の家で保管・使用され続けている例 (ホアビン省 Lạc Sơn 県 Tân Lập 社) を実見した。

II-7 類II式の細分と年代、ならびに生産地問題について

ヴェトナムの銅鼓群において最大のグループをなす類II式銅鼓は、広西を中心に出土するII式銅鼓と似て非なるものであることは従来認識されていたものの、新分類枠として独立させたのは吉開 [1998: 208-209] の分類が最初である。霊山式 (吉開分類のII式西群) あるいは北流型 (II式東群) の銅鼓の要素を受け継いで成立したと見られる類II式には、年代論上の不備が多い。近年 Trịnh Sinh [Trịnh S. and Quách V. A. 2002; Trịnh S. and Nguyễn A. T. 2001] らにより、系統的分類が進められており、そこには一定の成果を見ることができる。彼らは、銅鼓鑄造時の湯口の位置に2系統あることを指摘している。第1系統は、鼓面の外縁裏面に2カ所と鼓面近くの合範線上にもう1カ所を、二等辺三角形の関係になるように配置したものである。第2系統は、間隔を置いて合範線上に3カ所を配置したものである。管見では、これと

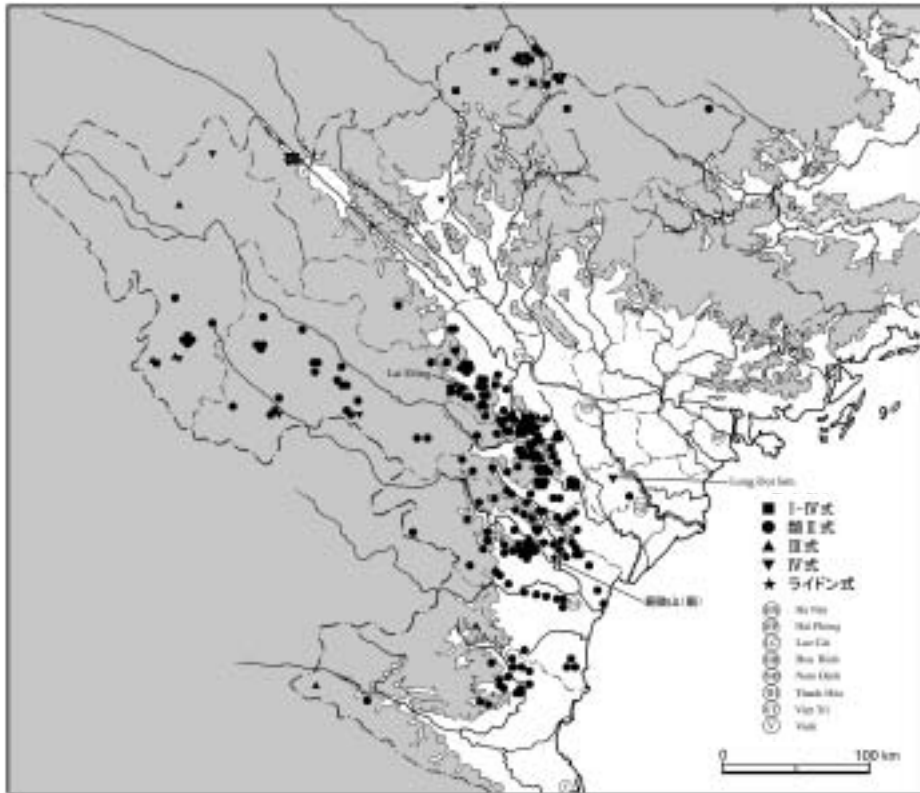


図6 北部ヴェトナム紀元前11世紀以降の銅鼓分布

全く同じ湯口痕を残したI式やII式銅鼓はないようなので、I式やII式銅鼓間に直接的系譜関係を考える必要はないであろう。また、筆者はII式との具体的な系統関係があまり明瞭化できない現在において、この銅鼓群をV式として、独立させて呼んだ方がよいと考えている。

ところで、この類II式銅鼓には形態的にかなり異なる二つのタイプが存在する。一つは鼓体の真ん中前後で、くびれるように鼓体上半と下半が分割されるものである(図2-10)。鼓面上の蛙は3体か4体で、鼓面中央の太陽紋の光芒数は4芒、7芒、8芒が普通であるが、まれに平野部の封建王朝で使用された礎石などの周圈文様に用いる蓮弁文を光芒として用いている場合がある。このタイプはホアビン、フート、タインホア、ゲアン、ソンラ各省などで出土している。

もう一つは、鼓体の真ん中より上位で、頭部と胴部が分割するくびれが存在する(図2-11)。頭部はやや膨らみを持つ一方、胴部は曲線状の裾広がりである。鼓面上の蛙は4体が普遍的で、鼓面中央の太陽紋の光芒数は8芒である。このタイプの銅鼓もハータイ、ニンビン、ハナム各省などの紅河平原の南縁域からフート、ホアビン、ゲアン、タインホア、ソンラ各省山岳域に

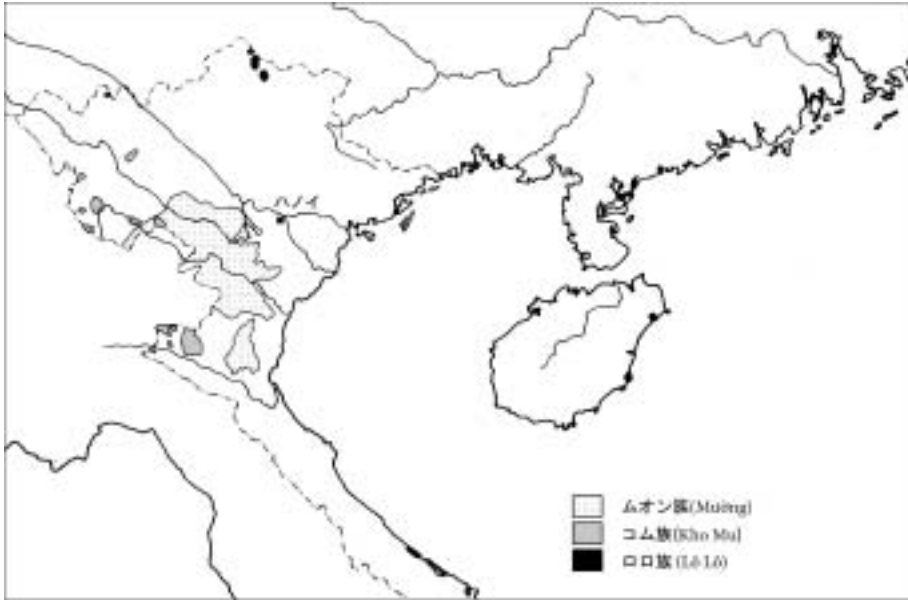


図7 銅鼓使用民族分布

広がっている。分布域としては前者の分布域とかなり重複するが、より広範な分布である。

本論では前者を類Ⅱ式A型、後者を類Ⅱ式B型と便宜的に仮称しておく。

さて、これらの類Ⅱ式の年代はかなり幅の広い年代枠が与えられており、始まりはⅠ式との併存を考えるほど古い年代を想定している研究もあるが、それを支持する考古学的脈絡を伴う発見例はない。こうした状況下、吉開 [1998] が、広西のⅡ式銅鼓の研究から、Ⅱ式東群（典型北流型）との類似点を捉え、Ⅱ式の終末年代から、類Ⅱ式銅鼓の年代上限が10世紀を越えないとした仮説を提出したことは画期的であった。⁴⁾

ここでは考古学的出土状況がはっきりしているものや、他種の青銅器や陶磁器、さらには彫刻類との比較で、ある程度の年代枠を抽出してみたい。

まずは類Ⅱ式A型銅鼓の年代比定を、筆者が調査を行っているホアビン省の資料を中心に簡論する。Nguyễn Thành Trai [1985] は、類Ⅱ式銅鼓に李・陳朝期さらには後黎朝期の彫刻などと文様が類似することを指摘しているが、類Ⅱ式鼓のなかには確実にその年代が李・陳朝期と考えられるものがある。それはホアビン省内 Kỳ Sơn 県 Thống Nhất 社出土の Xóm Râm I 鼓 [Hoàng V. *et al.* 1978] で、鼓面径 50.2 cm 脚径 45.9 cm を計り、類Ⅱ式A型に分類さ

4) 吉開は類Ⅱ式の起源において、Ⅱ式東群（典型北流型）からの系譜を重視している。しかし、二重の弦紋や耳が環耳ではなく、扁平耳であることなどⅡ式西群（典型靈山型）とのつながりもあると思われる。

れる。鼓面中央部は、打楽器として使用のためか抜け落ちているが、その欠損部に隣接する文様は4体の龍文である。その龍文は李・陳朝期の碑文や仏像等の礎石などに施される龍文そのものであり、報告者は11-12世紀の年代を考えている。鼓面に浮紋として付された馨形雲文は石像彫刻の同類文様を、Tống T. T. [1997] が13～14世紀のものと考えている。またこの馨形雲文は青磁水柱 [Bùi M. T. n. d.] にも、浮紋として付されており、陶磁器形態から13世紀に比定可能である。従って、Xóm Rậm I 鼓には、12～13世紀の年代を想定しておくのが適当であろう [西村 2001b]。さらにホアビン省には、類Ⅱ式 A 型にも龍文が入った Xóm Dênh 鼓 (図2-10) がある。当鼓は龍文が李朝期よりも陳朝期のものに類似し、花文や蓮花文が14世紀の印花碗に出現するものによく似ていることなどから、14世紀頃と想定したい。Ⅱ式 A 型銅鼓には李・陳朝期の龍文を鼓面に持つものが多く、器形的特徴も他の銅鼓群と一線を画しており、後述するように、その生産脈略に特別な背景があることを示唆している。

また、類Ⅱ式 B 型鼓に関しては以下の年代的情報を掲げる。

ホアビン省では Kim Bôi 県の Kim Truy 古墓群 [Phạm Q. Q. 1993] の2号墓で類Ⅱ式 B 型鼓と陳朝期の鉄彩淡色釉長胴壺が伴っている例があり、大量に共存した無釉陶器も陳朝期のものと考えられる。この類Ⅱ式 B 型鼓の年代下限は14世紀ということになるが、鉄彩淡色釉長胴壺の蓮花文は13世紀にまでに遡る可能性もある。当銅鼓にはハート形菩提樹葉文や蓮弁文、さらには二重方角文がスタンプによりほぼ全面に施されたもので、類Ⅱ式 B 型鼓のなかで、かなり普遍的に見られる形態・文様を有している。Bao La 鼓 [Quách V. A. 2003] は写実的な鳥文や菩提樹葉文などは比較可能な資料がなく、年代比定に困難を伴うが、亀甲文、牡丹文などが14～15世紀に比較可能である。また鳥文に伴う雲文は15世紀頃の陶磁器文様に比較可能なものがあり、陳朝期のものとは様式的に離れている。また、上述の Kim Truy 古墓群の3号墓では三つの類Ⅱ式 B 型 (図2-11) の共存が、1号墓では二つの類Ⅱ式 B 型の共存が確認されている [Phạm Q. Q. 1993]。これらは形態的に上記二つの銅鼓にかなり近く、これらの銅鼓の文様には15世紀の青花陶器に使用される菩提樹葉文や圈文に類似のものが存在する。従って、これらの銅鼓も年代の下限は15世紀であろう。

さらに、こうしたホアビン、タインホア、フート各省などの紅河平原南接山岳域に分布する類Ⅱ式とはやや異なる類Ⅱ式が、ハザン省やカオバン省、国境を越えた雲南省の文山県 [夏 2005]、ラオカイ省に北接する河口県 [尹 1995] でも発見されている。ハザン省発見の BTHG. KL/D 18 鼓 [Phạm M. H. 2001] や雲南省文山董馬鼓 [夏 2005: 268-269] は形態的に類Ⅱ式 B 型同様、頭部と胴部間を大きく分ける突帯が存在し、頭部が膨らみを持ち、胴部はまっすぐにやや裾広がりのもので、類Ⅱ式 B 型の Bao La 鼓などに近い形態である。文山董馬鼓は光芒や2重圈線による文様配置法も同じである。しかし、BTHG. KL/D 18 鼓の場合、耳が頭部と胴部をまたいで鋳接されており、鋤等を引く農作業風景が浮紋で鋳出されている。文山董馬鼓には、

字文や動物文なども鋳出されている。これらは、IV式との類似性も窺わせるが、逆にIV式に特徴的な光芒間の鳥頭文や退化羽人文などがなく、あくまでも類II式B型のなかでの変異と考えられる。BTHG. KL/D 18 鼓は四重の蓮弁紋が特徴的で、類似例が14～15世紀のヴェトナム青花陶器の蓮弁に存在し、この銅鼓もその年代に納まると考えられている [Phạm M. H. 2001]。筆者も同意見だが、この蓮弁文は正確には15世紀のものに最も対照可能である。

以上、陶磁器や他の青銅器との文様比較では、16世紀以降の時期を想定できそうな例はホアビン省出土例のみならず、他省例にも見受けられない。従って、16世紀頃にはこの型式の銅鼓生産は終息していた可能性が高いと推定する。この判断は、後述の阮朝期生産と考えられる龍文を鼓面に有す特殊な形態・文様をもつ Lai Đồng 鼓（フート省）が全く異なった形態・文様を示し、形式的連続性・系譜的親和性を想定するのは無理があることから支持される。

以上から類II式A型、類II式B型両方が陳朝を前後する年代に納まる傾向を理解できる。具体的な時期変遷としては、類II式A型の中には李朝期に遡るものが存在するが、逆に後黎朝期に下るものではなく、類II式B型のものには陳朝を年代の中心として、後黎朝初期（15世紀）にまたがる年代幅を想定しておく。

従って、吉開の論じるII式の生産終末年代と類II式の製作開始年代間に、空隙が生じている可能性もある。そのことが、類II式をII式とは似て非なるものへ導いた可能性がある。

ここで、この類II式鼓の生産の問題に立ち入るが、前述のように龍文は李・陳朝期には王宮、仏教寺院など限られた建築や石像物に用いられたもので、当時の社会において決して一般的なモチーフではない。大西 [2001: 38-41] が具体例を挙げているが、龍は李・陳朝王権と密接に結びついている。李・陳朝期に製作された鉄彩長胴無頸壺に描かれた兵士の足に龍文を入れ墨したものがあり [三上 1984]、また陳朝王族自身や軍兵にも龍文が施されていたことが記録されている (『大越史記全書』1299年8月の条)。後の後黎朝期には龍文を王室や朝廷に限りて使用する定めも出されている。

また、類II式鼓のモチーフには龍文以外に蓮弁などの仏教的モチーフも多用されており、仏教寺院やその石碑、石彫などと同じ文化的脈絡で製作されていることが理解できる。李・陳朝期の仏教も王室の保護下に発達したものである。

さらに、龍文を有す銅鼓は類II式の中でもわずかな存在であることは、製作量がその他の類II式銅鼓に比べ圧倒的に少なかったと考えてよい。李・陳朝廷が製作を管理して、山間民族への贈品等に利用した可能性を考えるべきであろう。従って、類II式銅鼓の製作地をキン族の居住域、つまり紅河平原などの平野部に求める Phạm Quốc Quân [1985] の意見は的を射ている。

II-8 III式銅鼓

III式に関しては現在まで、ライチャウ、ソンラ、ゲアン、ダックラック省などラオスと国境を接する北部・中部の西域各省でしか発見されていない(図6)。ヴェトナムではI式からIV式の中で、発見数の最も少ない銅鼓である。

この銅鼓に関してはクム(Kho Mu, Khum: オーストロアジア語族)族の民族使用例が報告されている[Diệp Đ. H. and Đậu X. M. 1976]。彼らは正月や家の新築などの祭礼時に使っている。また、銅鼓の入手に関しても村人から金を集めて銅鼓を買いに行った話やラオスから僧を招いて銅鼓を鑄造させた話[Diệp Đ. H. 私信]が収集されている。ラオスでも、クム族の銅鼓使用例が多く報告されている[川島 2006]。また、タイ・ビルマの北方山岳域ではシャン族が製作したIII式銅鼓をカレン族が使用している[Cooler 1995]。雲南では、西盟県を中心に多く発見され、西盟県などの佤族(モンクメール語族)、西双版纳泰族自治州の克木人(ヴェトナムのクム族に相応するようだ)、文山壮族苗族自治州の俚人(彝族の支族、ヴェトナムのロロ族に対応)、西双版纳自治州や徳宏自治州などの泰族などに現在の利用例が報告されている[呉 2005]。

II-9 I-IV式中間型

I式後期からIV式への移行型で、南中国では遵義型と呼ばれている。吉開分類では、10～13世紀頃に位置づけられている。ヴェトナムでは、ハザン省とカオバン省の北域の一部に集中して分布し、I式後期やIV式の分布とも重なりをみせる(図6)。

II-10 IV式

ヴェトナムでの分布中心は、ハザン、カオバン、ラオカイ、ライチャウ、ソンラ省などの北部山岳部の中国国境域に集中し、ハザン省での出土例が最も多い(図6)。ただし、平野部でもハナム省のLong Đồi Sơn(ヴェトナム歴史博物館所蔵資料)での孤立例が存在する。中国では、広西北西域・雲南東域、貴州を中心に出土例、民族例が分布する。

IV式銅鼓の場合は、広西と雲南に国境を接するハザン省に多く居住するチベットビルマ語族のLô Lô(ロロ)族[Quang V. C. *et al.* 1974; Lò G. P. 1996]、タイ語系のザイ(Giay)族[Trần H. S. 1993]やカダイ語系のPu Peo(プーベオ)族[Nông T. 1977]の使用例などが報告されている。ロロ族の場合、一族の族長が銅鼓を管理し、普段は地中に埋納し、葬礼時のみ掘り出して利用する。一族のなかで死者が出た場合、地中の銅鼓を掘り出し、葬礼を行う家の前でつるす。そして、祭壇の前で、死者のために祖霊の出迎えをお願いするときに、叩く。また、広場の下の仮屋で銅鼓をつるし、水牛か牛を供犠するときに、男女で輪舞するが、その時に、二つの銅鼓の鼓面を向き合わせてつるした銅鼓を叩く。さらには死者の霊が現世を離れあの世に行くための儀礼時にも、銅鼓を叩き踊る。この時には2-3対の銅鼓を使うこともある。その後、

死者を墓に埋めた後、9晩続けて銅鼓を叩き、踊り死者をしのぶ。

また、銅鼓には、雄鼓と雌鼓の区別があるが、それは世界が洪水に見舞われたとき、二人の姉弟のうち、姉が大きい銅鼓に、弟が小さい銅鼓に体を結びつけて助かり、そこから種族が、再び復活したという伝説に基づいている。同様に、ロロ族の銅鼓は鼓面部に二つの小穴が開けられているが、これも二人の姉弟が魔物を退治した伝説に基づいて説明されている [Lò G. P. 1996]。属明期の(1407-27年)ことが詳しく記録されている『安南志原』(17世紀末成立)では、広西・雲南国境近くに住む僚が、銅鼓を屋敷の庭に置き儀礼に使うこと、銅鼓に雄雌の区別があることを記しており、民族習慣に関する記述自体は、ロロ族のそれに近いようだ [樫永私信]。

II-11 Lai Đồng 式

フート省ティンソン県の Lai Đồng (ライドン) 社より接収された銅鼓は上記の5つの型式と全く異なるものである(図2, 6)。頭部と胴部は真ん中で若干くびれをもって、分かれているが、共に無紋の長方形浮紋をいくつかめぐらしたのみのもので、文様帯を構成はしていない。鼓面には2匹の龍と雲文が絡み合ったものが配置され、中央部の太陽紋も12芒ながらも、これまでのどの型式の銅鼓とも類似していない。龍文などから判断すれば阮朝期 [Nguyễn A. T. 2001] と考えてよいのであろう。この銅鼓は他の銅鼓との系統的つながりを求めるよりは、青銅製太鼓などとの関連を追及すべきであろう。

フート省ティンソン県ではムオン族の間で Lai Đồng 式鼓や類II式鼓、2個を対にして使う伝承が残されている [Bùi Tuyết Mai 2001]。村落の集会所である亭 (Đình) での儀礼時や族や家族単位での儀礼時に用いられたようで、銅鼓を対にして正置状態で吊し、その下に穴を掘り、音の響きをよくしたようだ。

III 分布中心域から外れる例の文化的脈略について

上述の銅鼓型式ごとの分布において、分布中心から外れているものがあり、しかもその出土の脈略やそこに至るまでの経過が理解可能なものがある。ここでは、貴州羅泊湾墓例の石塞山型例、コーロア城出土のドンソン型前期例、類II式やIV式などの寺院収蔵例などについて略述し、銅鼓が経てきた文化的脈略を考察する。

貴州羅泊湾墓例

石塞山型銅鼓は、雲南と北部ヴェトナムに最も多く出土するが、その分布の最西端の広西壮族自治区貴州羅泊湾鼓は [広西壮族自治区博物館 1988]、紀元前2世紀前半の漢系墓葬の副葬品を埋葬する器物坑から出土している。出土遺物や出土文字資料から、被葬者は南越王国の高

級官吏クラスの王族と推定されている。銅鼓にはその重量が刻文されているが、これは中原から伝わった風習である。また、銅鼓の鼓面部を切断して、案（脚つきの盆）に改造したものやドンソン系桶形青銅器も出土している。ともに、非漢系のドンソン系文化領域の青銅器に、漢系物質文化（重量記載、案への改造）の脈略が加わった後に、他の漢系青銅器とともに副葬品として埋められていることが理解できる。被葬者が生前に、何らかの理由で貢納品などとして異民族から入手したものであろう。

同じく前期の広西の貴県高中8号漢墓（前漢期）から出土した貴港高中鼓〔黄 1956〕も、ドンソン型前期に属し、北部ヴェトナム製と考えられるが、羅泊湾鼓と同様な文化的脈略を想定する必要がある。

コーロア城出土例

I式ドンソン系前期の銅鼓分布で例外的なのはコーロア城出土例（図2-3、図3）である。紅河平原北域（紅河本流から北）の南縁に位置するコーロア城は、従来からその年代的、文化的位置づけに様々な意見が提出されてきた。城は紅河平原北縁から続く残丘・河岸段丘地帯の最南端の舌状台地上に位置しており、南からの攻撃に対する防御を意識している。三重の土塁構造をもち、外塁の周囲長（8,000 m）は、現存するものではヴェトナム史上最大を誇る。また、漢代成立の『広州記』や『交州外域記』等は、安陽王が築いた城と伝えている。現在までの考古学的知見をもとにするなら、城郭自体の建設は紀元前2-3世紀で、銅鼓の製作年代と懸隔ないことが理解されつつある〔西村 2006〕。

この城郭の内塁外の南域の Mả Tre 地点では、Cổ Loa I号鼓を容器にして、Cổ Loa II号鼓片、ドンソン型青銅器、鍬先、三翼鏃や半両銭などが埋納されて発見されており〔SVHTTHN 1983〕、1977年には内塁外の北域で Xóm Nhồi 鼓が、ドンソン型青銅器片と共に収集されている〔Trần Q. V. *et al.* 1978〕。これらの青銅器類が墓の副葬品ではないとの断定は不可能だが、いずれにしても意図的に城域に埋められたものに相違ない。共伴した青銅器の性質や銅鼓の持つ意味については、他稿〔西村 2006; Nishimura in press〕で詳細に述べたので割愛するが、結論としては以下のことを提示した。銅鼓は意図的に破壊された、あるいは破壊される予定の銅鼓であり、鋳つぶし用の他の青銅器片とともに埋められたものであること。貴県羅泊湾墓鼓例に類似した重量銘文らしきものが刻まれていることや青銅の成分分析から、銅鼓は、三翼鏃や鍬先のようにコーロア城製ではなく、紅河平原南部以南のドンソン文化の領域での生産と考えられることなどを提示した。従って、これらの銅鼓はドンソン文化領域で使われていた他のドンソン系青銅器とともに、何らかの理由（戦利品や貢納か？）で紅河を挟んで対峙した異文化勢力拠点のコーロア城に持ち込まれ、銅鼓のももとの役割を象徴的に封じられ、切断破壊あるいは埋納に至ったことなどである〔西村 2006〕。

羅泊湾とコーロアの例は、銅鼓のももとの生産者や使用者ではないものの、生産者や使用者との関係を通じて、銅鼓の文化的脈略をある程度理解した上で、その脈略を象徴的に封じるような形で、埋納や埋葬を行った例であろう。

廟や寺などの宗教施設に祀られる例

文献で確認できる例としては、李太宗が太子の時にいった占城遠征（1020年）時に、タインホア省 Vinh Lộc 県 Đàng Nệ 社にある銅鼓山と祀られていた銅鼓を昇竜に招来し、護国神として京城右伴に祀った例（後述）である（『大越史記全書』）。この銅鼓は時代を鑑みるなら、Ⅰ式からⅡ式にかけての各型式が候補となるが、もともと祀られていた銅鼓山の位置と周辺で発見される銅鼓を条件に加えると、Ⅰ式であった可能性が最も高い。また、『嶺外代答』の記述では、「広西土中銅鼓，耕者得之。……交趾嘗私買以歸復埋於山，未知其何義」とあり、銅鼓が地中から掘り出され、広西から交趾へ運ばれ、おそらく信仰材として再利用されていたことが理解できる。

1990年代、ハイフォン省キエンアン県 Đông Hoa（ドンホア）に類Ⅱ式銅鼓を祀る寺があった（Mỹ Khánh：ミーカイン）。これは信者が入手した銅鼓を寺に寄進したものであり、寺の縁起や歴史とは全く関係はなく [Lê T. H. 1999]、銅鼓自体、寺僧の所有で、寺僧が寺を去るとともに銅鼓も寺から持ち去られている（筆者聞き取り資料）。

このように信仰建築に銅鼓を寄進した例は非常に多かったようで、ハナム省の Long Dợi Sơn（李朝創建の寺あり）のⅣ式鼓や黎貴淳が伝えるヴィンフック省の銅鼓寺（18世紀）[Nguyễn X. L. 2000] なども、同様な脈略で考えるべきものであろう。

以上の例はももとの生産地あるいは出土地点より、かなり長距離を移動した例であるが、近距離例においては、昇竜に銅鼓が招致されるもとなったタインホア省銅鼓山での銅鼓廟、水路掘削時に発見され村人が自村に持ち帰って祀っていた Ngọc Lũ Ⅰ鼓 [Phạm M. H. *et al.* 1987] やハタイ省のダウ（Đầu）寺に保管されていたⅠ式鼓例 [Nguyễn D. H. 2001]、ゲアン省西部の Thai 族が掘り出した銅鼓を再利用して、家庭内で祀っていた例 [Diệp D. H. 1987] などを枚挙できる。

いずれにしても、これらは一度埋納あるいは埋葬を経過することにより、銅鼓の当初の役割を終え、再び地上に掘り出された時に、別の文化的価値を持たされ再利用されている。

銅鼓の空間分布を解釈する上では、上述のようなももとの文化的脈略から離れた場合が含まれていることを考えなくてはならない。逆にこれらの例を除けば、分布が特定域にかなり集中する場合においては、ももとの文化的脈略がかなり濃厚な状態での使用を表しており、銅鼓使用文化を有す空間単位として捉えることが可能となってくる。具体的には、北部ヴェトナムのドンソン型銅鼓、類Ⅱ式銅鼓、また、広西でのⅡ式や、雲南やラオス・タイ・ビルマの山

岳域でのⅢ式の分布域、広西、貴州、雲南、四川、ヴェトナム最北域をまたぐⅣ式鼓の分布などに、そうした銅鼓使用文化空間を見いだすことが可能となる。当然、その逆（銅鼓を使用しない社会）も然りである。

IV 民族形成史理解のための銅鼓

これまでに論じてきた銅鼓の空間的集中分布を根拠として、文献資料や民俗学資料を援用しながら、本章では北部ヴェトナムの民族形成史の問題に触れてみたい。

類Ⅱ式銅鼓が主にムオン族によって使われてきたことは、Ⅱ章で紹介したように、13-14世紀のムオン族の古墓から出土し、現在まで用いられ続けていること、さらには過去の伝承にも銅鼓が登場することなどから異論はないであろう。また、その生産地については、類Ⅱ式鼓がムオン族居住域内ではなく、むしろキン族居住域、さらにはその権力中心地である昇竜都城内を想定した方がよいことも述べた。

それでは、銅鼓が平地民キン族と山岳民ムオン族を結びつけた理由は何であろうか。

以下に挙げる2例は、キン族とムオン族の銅鼓の役割を理解するのに重要な手がかりである。

1：ホアビン省のフランス植民地時代の地誌 [Grossin 1926: 21] に記載されたムオン族の伝承では、李聖宗のタイ族征討時に、李朝側に協力したムオン族の首領（土郎）が征討後、加位（経略使）・加封を受けたこと、陳聖宗が Đà 川の Chợ Bơ に進軍した際、周辺のムオン首領達とその支配権等を保証され、陳聖宗が鑄造させた銅鼓が各首領に贈られたことなどが記されている。李・陳朝時の西北部征討は正史や他の資料からもある程度検証可能なため、それなりの信頼すべき情報を含んでいるのであろう。桃木 [1992] は李・陳朝期に起きたタイ系諸民族の西北部からチュオンソン山脈での活動活発化とそれに伴う抗争激化を「西」からのヴェトナム王朝への脅威として捉えている。

2：タインホア省 Vinh Lộc 県 Đàng Nệ 社にある銅鼓山とその麓の銅鼓山神祀（Đền Đông cổ Sơn Thân）も興味深い（図6）。銅鼓山は前黎朝の黎大行による占城遠征（989年）出発地と想定されている [Nguyễn D. T. 1985]。『大越史記全書』や『越甸幽霊集』（14世紀成立）によると、銅鼓神は李朝の李太宗が太子の時に行った占城遠征（1020年）を助け、祀られていた銅鼓とともに昇竜（現ハノイ）に招来され、護国神として都城内の仏教寺院聖寿寺の後方（現在の Thùỳ Khuê 通りの銅鼓祠（Đền Đông cổ）に、改めて祀られている。1028年には銅鼓神は封爵を受け、この銅鼓祠では皇帝が諸侯との会盟儀式を行う場となっている。これは、銅鼓が都城内の宗教施設で用いられていた歴史的事例となる。さらに銅鼓神は、第一次元寇を撃退した1285年に靈応大王として陳朝より勅封され、1288年には昭感の字が加封され、1315年に

は保祐の字が加封されて国家守護神としての扱いを受けている〔『越甸幽霊集』〕。前出の陳聖宗は1278年から1290年にかけて上皇として執政を行っている。

上述2例より、銅鼓が李・陳朝期に国家守護神的扱いを受けたこと、その時期に都城を中心に平野部で生産された類Ⅱ式鼓がムオン族居住域に広く流通したことは無関係ではない。銅鼓の贈与や交易などを通じて、キン族政権側がムオン族を慰撫・利用しようとしたことにつながっているはずである。そして、都城内の銅鼓祠での会盟もそうした中央政権とムオンなどの銅鼓利用民族の関係維持を象徴していると考えてよい。当然、銅鼓自体の生産の主体はキン族側にあり、使用の主体はムオン族側にあったのが類Ⅱ式鼓の実態であろう。民族学的情報も筆者の推測を支持している。つまり、ムオンが銅鼓を鑄造した話は、神話的な銅鼓鑄造起源の話以外はなく、さらには実際の青銅器鑄造例なども全く報告されていない。20世紀初めに北部ヴェトナムの山岳民を踏査したアバディ [1944] によれば、ムオンやタイ系の諸民族においては、簡単な鍛冶や銀細工を営む例を認めるのみで、鑄造を伴うような本格的金属手工業は報告されていないし、楽器として頻用される銅鑼などもキン族の既製品を手に入れていることが記録されている。

このような状況を考慮すれば、類Ⅱ式鼓が現在まで連綿と使われているのに、なぜ16世紀を前後とするある時点で銅鼓生産が途絶えたかも説明しやすくなる。つまり、現代でも葬礼などで積極的に銅鼓を使用しているムオン族に、銅鼓を必要としなくなった理由を見いだすことは難しい。また、ムオン族と平地民との交渉関係は、より新しい時代においても継続して確認されることである [宇野 1999]。ムオン族側には銅鼓への需要があったにもかかわらず、キン族側に銅鼓を排除するような思想、社会状況が強調され、生産停止に至り、徐々にムオンの銅鼓利用も減じていったと考えたい。⁵⁾ ちなみに『大越史記全書』では、延寧3 (1456) 年の記述「帝親率百官拜謁山稜，乃旨揮藍山等陵官……寢廟用牛四，擊銅鼓，軍士謹應……」が、銅鼓の朝廷内での最後の使用を示すものと考えられる。藍山つまり藍京 (Thanh Hoá 省 Thọ Xuân 県 Xuân Lâm 社) は、後黎朝故地である。後黎朝創始者の黎利の母方はムオン族とされ、実際に藍京域内のバーザウ (Bà Dâu) 山から類Ⅱ式鼓も出土している。吉開 [2000: 53] が指摘するように、後黎朝の時代に儒教が政権思想として積極的に強化採用されていく中、異質の思想を具現する銅鼓は次第にその役割を減じていったのであろう。儒教思想の普及は洪徳年間 (1470-97年) 以降という研究 [佐世 1999: 16] もあり、こうした変化と類Ⅱ式鼓の生産停止を

5) 類似した状況を看取できるのが、銅鼓以上にムオン族の古墓から多く伴出する陶磁器である。これらは使用者側のムオン族の嗜好を反映して作られているものは非常に少なく、ほとんどはキン族居住域からの単なる輸入品である。そこに読みとることのできるものは、製作者である低地民の生産した陶磁器が時間軸上でどのように変化したかということと、使用者である高地民がどのような陶磁器を購入あるいは入手することを好んだかということのみである [西村 2001b]。

重ね合わせる理解も検討が必要であろう。このことは言い換えれば、黎朝初期まで、特に李・陳の王権・政治思想に極めて非中国的な、あるいは在地的なものがあったということである。

ところで、ムオン族にはライドン式鼓を使う例もあり、さらにはⅡ式鼓やⅠ式鼓の分布域も現ムオンの分布域に重なることが多いことを考えれば、ムオン族の銅鼓利用史は相当長く、ムオンとキンが分化する以前の祖集団（Proto-Việt/Mường）の時代、つまり北属時代あるいはそれ以前にまで、銅鼓使用を遡らせるのもあながち無理な仮説ではなくなる。⁶⁾

Ⅰ式とⅡ式や類Ⅱ式の分布を比べた場合に、紅河平原やタインホアのMã川下流域平野部から山岳域に偏在・後退していることが明らかである。そして、紅河平原やタインホアの平野部の北属時代は、交趾郡や九真郡さらにはその後の中国王朝下の郡県制 [桜井 1979]、州県制の実効支配下にあった領域である。実際に、こうした空間は磚室墓などの中国系物質文化が多く確認されている [西村・西野 2003]。これはドンソン文化の空間において、北属時代の平野部で中国系文化が浸透し、山岳部の非漢化空間のなかには銅鼓使用文化が残存した結果と解釈できる。

そして、各型式の分布が明らかにしたように、若干例のⅠ式後期やカオバンやハザンなどの一部地域を除いて、紅河本流から北域には銅鼓の集中分布域は存在しない。先述したように、筆者は紅河を境界線とする南北の銅鼓の分布の違いは、銅鼓を儀器として社会内部に組み込んでいた集団とそうでない集団の差をあらわし、現在の民族分布に至る形成過程を理解する鍵と考える。

ここで、北部ヴェトナムの初期国家形成期の伝承に踏み込んでおく。紀元前2世紀の趙佗以前に登場する王は雄王と、雄王（雒王の表記伝承変形）を倒し後に趙佗に倒される安陽王のみである。『水経注』は『交州外域記』を引用して、蜀の王子が雒（雄）王を討ち、雒侯を従わせ、安陽王として即位した話を記載しており、安陽王系の集団と雄王系の集団差異・対立がかなり以前からあったことを窺わせる。既知のように、雄王伝説はキン族とムオン族の間で共有された伝説である。この雄王を祀った雄王廟（Đền Hùng）は、フート省ラムタオ県ヒーオン社のギアリン山にあるが、この山の麓で大型のドンソン型銅鼓（図3のHy Cương鼓）が出土している。当地域から西に紅河本流を渡れば、タインソン県などのムオン族居住域にすぐ到達する。雄王を祀る廟（Đền）はフート省・ハタイ省のソントイ地域、ヴィンフック省の西端（Lập Thạch 県）を中心に濃密に分布する [Nguyễn X. L. 2000: 395]。

これに対し安陽王やその配下の武將を祀る廟（Đền）や伝承は、ヴィンフック省の東から、現

6) “ムオン”族として、キン族と区別する習慣・政策はフランス属領期に始まるという Nguyễn Lương Bích [1974] の議論に異論はないが、平地民（キン）が山地民を自集団と区別してきたことは、山岳域居住民に対する呼称（壘、隙）や山岳域独特の地名呼称（峒、究）などから、かなり古い時期に遡ることは明らかであろう。

ハノイ市の北部、バックニン省などに多く分布し、雄王伝説の分布域と重なりを示していない。また、安陽王伝説の異伝は、カオバン省のタイ族 [Bé V. D. *et al.* 1992: 52-53]、広西の龍州 (ランソン省北部に近い中越国境地域) の壮族 [李 他 1995: 429-436] でも確認されている。また、『越甸幽霊集』(13世紀末成立) は、安陽王の補佐を務めた高魯が後に雒侯に殺されたことについて、高魯が高駢の問いに答える形で、安陽王は金鶏の精であり、雒侯が白猿の精で、祖先シンボル的に別起源であることに触れている。従って、筆者は、雄王伝説を頂点とするヴェトナム系集団と安陽王伝説などを頂点とするタイ・ヌン (Tày・Nùng) 系の民族集団の文化差が、すでに銅鼓の儀礼上の使用・不使用により現れていたと考える。

ところで、紀元2世紀を境として銅鼓分布の中心が紅河平原を中心とする北部ヴェトナムから、Ⅰ式後期鼓の分布中心は広西郁江流域と北部ヴェトナム北域の一部に移り、Ⅱ式銅鼓は広西南部で盛行する。この現象は、紅河平原域支配拠点 (龍編城など) などで生産されていた銅鼓が、土爨などの龍編政権の仏教導入 [西村 印刷中] とその保護により、異質な思想を具現する銅鼓生産が停止し、逆に広西では、漢化が進まない広西南部において、タイ系あるいは他の民族間にその在地社会組織の儀器として受け入れられ、土豪勢力の発展に並行して、生産活発化につながったと考えられるのではないか。この場合、タイ系民族 (現壮族、タイ・ヌン族の祖集団) を中心とする集団に、広西南部から北部ヴェトナム北域をつなぐネットワークがあったと理解できる。この背景には、紅河平原周辺では、銅などの金属資源を入手しにくく [西村 2006]、広西の北流県 (Ⅱ式鼓分布の一大中心) などでは銅鉱資源が豊富であったことも関係しているようだ。そして、唐代に正州正県制度が厳密に広西に適用され、それまでの在地土豪を官僚として間接支配・管理する政治システムが消滅したことが [張 他 1997: 454-455]、最終的にはⅡ式銅鼓の衰退・埋納へとつながったと考えたい。

また、紅河以南のタイ (Thái) 系民族 (図8) は、キン族やムオン族を囲むように分布するが、過去に銅鼓を使用してきた文献・伝承資料は非常に少ない。唯一、Đà 川、Mã 川上流域 (ライチャウ省、ソンラ省) に類Ⅱ式や若干のⅢ式やⅣ式のまとまった分布がみられる。類Ⅱ式の年代を参考にすると、李・陳朝期にムオンなどを通じて銅鼓を入手した可能性を考えた方がよいであろう。これはタイ (Thái) 族の年代記『タイプーサク』にある、李・陳朝期の頃、銅鼓を軍の行進に用いたり、戦争時の贈り物にしたこと、さらにはラオスの王に贈った記述 [Cảm Trọng 私信] に関係してくると考えられる。Đà 川は李朝以降黎朝期にかけて西北山岳部征討ルートとして重要であったことから、キン・ムオン各族との関係で、この時期に銅鼓利用習慣がこの地域に根付いた可能性がある。また、ラオカイ近くでタイ系ザイ族のⅣ式鼓利用例 [Trần H. S. 1993] が報告されているが、彼らは、明らかに後代に中国側から移住してきた、より漢化の度合いが強い集団であり、タイ (Thái) 族と同列に論じることはできない。また、Đà 川上流域には銅鼓利用民族であるムオンやクム族も居住しており、タイ系民族以外の使用

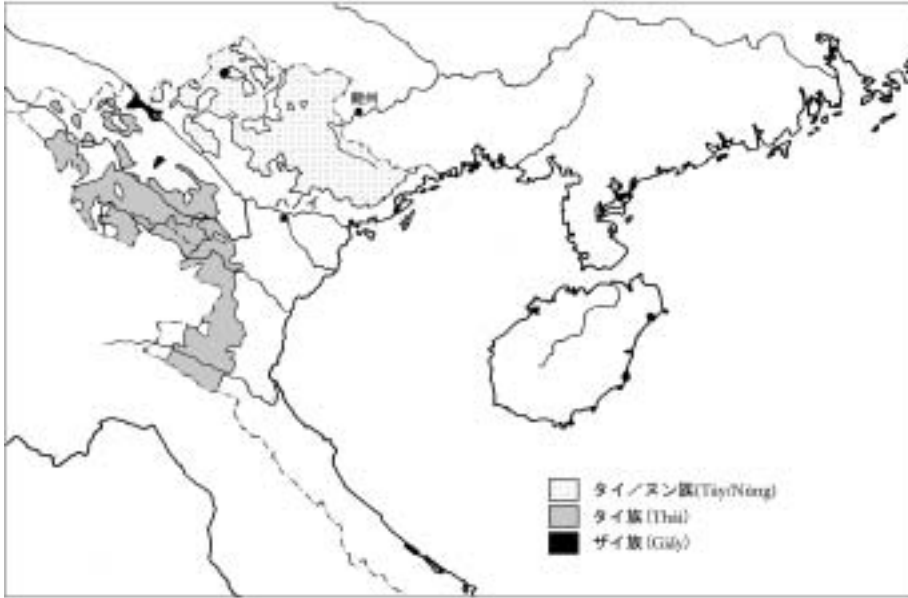


図8 タイ系民族分布

ケースも想定しておかなくてはならない。

以上をまとめると、銅鼓の不使用はI式ドンソン系中期頃までは、壮族、タイ・ヌン (Tày/Nùng) 族の祖になるタイ系民族に共通した現象であったと推察できる。従って、先史時代の末には、紅河平原の紅河本流右岸つまり、紅河平原南部はキン族やムオン族の祖集団 (プロト=ヴェト・ムオン) の居住域で、広義のタイ系民族が紅河平原北部あるいは紅河平原周囲の山岳部に居住していたと推定される。そして、北部ヴェトナムと広西でのI式ドンソン系銅鼓や類II式鼓の利用有無に象徴される紅河を挟んだ南北での文化地理的差異は、北側のチワンやタイ・ヌン (Tày/Nùng) 系集団と南側のタイ (Thái) 系集団の地理的空間の反映として解釈し、それは紀元1000年紀前半には形成されていたと考える。⁷⁾

次に、ロロ族についても銅鼓からその形成史の深淺を探っておきたい。ロロ族は、現在カオバン省のBảo Lạc 県とハザン省のMèo Vạc, Đông Văn 県などに主に居住しているが、その地域では非常に多くの銅鼓 (I式, II式, 類II式, I-IV式, IV式) が集中して、出土・確認されている。そして、先述したロロ族の銅鼓伝説で説明される鼓面に小穴をあけたものは、ハザンやカオバン省では、現利用例を含むIV式のみならず、I式後期, II式, 類II式B, I-IV式に亘っ

7) 言語学的には、紅河を挟んで北側に居住するタイ・ヌン (Tày・Nùng) 族は中央タイ諸語、南側のタイ (Thái) 族は南西タイ諸語に分類されている。

て存在する [Phạm H. T. *et al.* 1990; Phạm M. H. 2001: 34, 38; カオバン省博物館観察資料]。しかも、類例は、ヴェトナムの他地域ではわずかで、広西でも、I式後期とI-IV式に若干例 [広西壮族自治区博物館 1991: 115, 119] が確認されるに過ぎず、IV式に関してはほとんど存在しないようだ。

『大越史記全書』の1508年の記述には、「黒羅羅国人侵入朱村田開、……、往征黒羅羅、到朱村田、分立界碣、尋命焯等經理順 [興] 化處水尾朱開地方、以修理關隘」とあり、雲南のロロ族の国が、後黎朝支配域である現ラオカイあたりに攻め込み、その存在が紅河平原のキン族政権に脅威として認識されていたことを窺わせる。雲南省の文山自治州や広西那坡でも、ヴェトナムのロロ族に対応する俚人（彝族の支族）の銅鼓伝説が報告されている [喻 1995]。従って、ハザン省の類II式鼓や雲南の文山自治州や河口での類II式B鼓例も、キン族とロロ族間の経済・政治関係で説明できるのかもしれない。

以上より、ロロ族の銅鼓利用についても、1000年あるいはそれ以上の長期間の歴史を有する可能性があり、その利用史自体、ロロ族あるいはその祖集団としての時間深度を表していると考えられる。

以上の議論から、銅鼓の製作は、ヴェトナムでは断続的ではあるが、先史時代から19世紀頃まで続いたことが理解できる。ただし、製作者は状況により変化しており、必ずしも使用者が製作しているわけではない。先述したルンケー城での銅鼓製作以降、特に政権側あるいは政権所在地の集団が、銅鼓を実行支配できない地域への贈品・商品として利用した場合が多々あるようだ。

ヴェトナム民族史のなかにおいて、漢化やキン化をほとんど経験しなかったムオン族に、銅鼓の使用伝統が現在まで保存されたことは特筆すべきことであろう。おそらく、キン族政権やタイ系緒族との拮抗関係のなかで銅鼓は集団の帰属意識を誇示・増幅させるのに格好の儀器であり、ゆえに長い存続利用が許されたのであろう。歴代のヴェトナム王朝（丁朝、後黎朝など）にはキン族のみならず、ムオン系集団が積極的に立朝・参加していることも、この現象を理解する背景の一つとなる。

そして、ムオン族とロロ族の銅鼓利用史を参考にすれば、銅鼓の各型式分布とその使用の脈絡、伝承や文献資料などを重ね合わせていくことにより、銅鼓利用を中心とする民族文化の歴史深度を測ることができ、さらに、銅鼓を使わない民族の存在も並行して考えると、民族形成史を空間的に考察できることなどを明らかにできた。

もちろん、より新しい時代に銅鼓を採用した民族例や途中で銅鼓利用を放棄した民族例もあるようだ。また、同一あるいは同系統の民族であっても、銅鼓利用の有無がある場合（例：広西や貴州の瑤族や苗族とヴェトナムのザオ族、メオ族、広西の壮族とヴェトナムのタイ・ヌン族）、あるいは異なる銅鼓形式を用いている場合（ムオン族の類II式とライドン式、ヴェトナム

のロロ族のⅣ式と雲南彝族のⅢ式など)がある。いずれにしても、それぞれの例において、民族の中での集団分化やその時期、あるいは平地民との関係史の違いを探る鍵になるはずである。

儀礼や社会のなかで大きな役割を果たしていた物質文化が時間の尺度を持つことにより、その民族形成史の一つの尺度になることは確かだ、今後の他地域・他民族例での追求を期待したい。

謝 辞

本論執筆に当たって、吉開将人氏、Diệp Đình Hoa 氏、Phạm Minh Huyền 氏とは銅鼓の具体的論議をかわし、ご教示も頂いた。また、樫永真佐夫氏にはタイ族など各山間民族について、故 Cẩm Trọng 氏と故 Trần Quốc Vượng 氏にはタイ民族史についてのご教示を頂いた。八尾隆生氏と岡田雅志氏には文献史料についてのご教示を、Quách Văn Ấch 氏、Nguyễn Văn Hào 氏、新田栄治氏には貴重な資料を頂いた。ホアビン省博物館等には遺物実見のための労を払って頂いた。記して感謝の意を表したい。また本論で基盤にした銅鼓データは西野範子氏と共同作業で進めている銅鼓出土基礎データ集に基づいている。当データ集は、完成次第出版の予定である。

参 考 文 献

略語

BEFEO: *Bulletin Ecole Francaise d'Extreme Orient*, Paris.

KCH: *Khảo cổ học*, Hà Nội.

NPH năm. ...: *Những phát hiện mới về khảo cổ học Việt Nam*.

NXBKHXH: Nhà xuất bản khoa học xã hội, Hà Nội.

Bé Việt Đàng; Nguyễn Văn Huy; and Chu Thái Sơn, eds. 1992. *Các dân tộc Tày Nùng ở Việt Nam*. Hà Nội: Viện dân tộc học.

Bùi Thuyết Mai. 2001. *Người Mường trên đất tổ Hùng Vương*. Hà Nội: NXBKHXH.

Bùi Minh Trí. n.d. *Bình rượu Việt Nam*. Hà Nội: NXBKHXH.

Cooler, Richard. M. 1995. *The Karen Bronze Drums of Burma*. Leiden.

Cuisinier, J. 1946. *Les Muong-geographie humaine et sociologie*. Paris: Travaux et memoires de l'Institut d'Ethnologie. XLV, Institut de Ethnologie.

Diệp Đình Hoa. 1987. Nhận xét khảo cổ-dân tộc học về người Thái tư liệu điện dã ở miền tây Nghệ Tĩnh. *KCH* so 1: 25-36.

———. 2003. *Những con đường khám phá*. Bảo tàng lịch sử Việt Nam, Hà Nội.

Diệp Đình Hoa; and Đậu Xuân Mai. 1976. Người Tày Hay (Nghê An) và trống đồng. *NPH năm 1975*: 247-252.

Đỗ Nhu Chung. 2003. *Nghệ thuật trống đồng Thanh Hóa*. Hà Nội: NXBKHXH.

Goloubew, Victor. 1929. L'age du bronze au Tonkin et dans le Nord An Nam. *BEFEO* 29: 1-46

———. 1937. Le peuple de Dongson et Les Muong. *Cahier de l'Ecole Francaise d'Extreme Orient*.

Grossin, Pierre. 1926. *Hoa Binh: province de Muong*. Etude de Extreme-Orient, Hanoi.

Hà Văn Tấn, ed. 1994. *Văn hoá Đông Sơn ở Việt Nam*. Hà Nội: NXBKHXH.

Heger, Franz. 1902. *Alte metalltrommeln aus Sudost-Asian*. Leipzig.

Hoàng Vinh; Nguyễn Văn Huyền; and Hà Văn Thắng. 1978 Phát hiện trống đồng Xóm Rậm. *NPH năm 1977*: 197-199.

Hoàng Xuân Chinh. 2000. *Vinh Phúc thời tiền sử và sơ sử*. Vinh Yên: Sở văn hóa thông tin-thể thao.

Imamura, Keiji. 1996. *Prehistoric Japan: New Perspectives on Insular East Asia*. London: University College London Press.

- . (in press). The Distribution of Bronze Drums of the Heger I and Pre-I Types: Temporal Changes and Historical Background. *Bulletin of the Indo-Pacific Prehistory Association*.
- Janse, Olov. 1947. *Archaeological Research in Indo-China*, Vol. 1. Boston: Harvard University Press.
- Lê Thế Hoàng. 1999. Vài suy nghĩ về trống đồng Mỹ Khánh (Hải Phòng). *NPH năm 1998*: 281–282.
- Lò Giàng Páo. 1996. *Trống đồng cổ với các trống tỉnh Hà Giang*. Hà Nội: Nhà Xuất Bản Thế Giới.
- Nguyễn Anh Tuấn. 2001. *Trống đồng vùng đất tổ*. Phú Thọ: Sở văn hóa thông tin thể thao Phú Thọ.
- Nguyễn Đình Thực. 1985. Công trình đào kênh thời Lê Hoàn. Sở văn hóa thông tin Thanh Hoá ed. *Lê Hoàn và 1000 năm: chiến thắng Tổng Xâm lược (981–1981)*. Sở văn hóa thông tin Thanh Hoá.
- Nguyễn Duy Hinh. 1983. Trống bằng đồng, *NPH năm 1982*: 174–175.
- . 2001 *Trống đồng quốc bảo Việt Nam*. Hà Nội: NXBKHXH.
- Nguyễn Khắc Sử; Trịnh Năng Chung; Nguyễn Trung Thương; Nguyễn Thị Toàn; and Âu Văn Hợp. 2000. *Hà Giang thời tiền sử*. Hà Giang: Sở văn hoá thông tin tỉnh Hà Giang.
- Nguyễn Lương Bích. 1974. Trong lịch sử người Việt và người Mường là hai dân tộc hay một dân tộc. *Dân Tộc Học*, số 4: 1–19.
- Nguyễn Thanh Trai. 1985. Góp phần tìm hiểu trong loại II Heger. *Thông báo khoa học* số 3: 70–81
- Nguyễn Xuân Lan. 2000. *Địa chí Vinh Phúc (sơ thảo)*. Vinh Yên: Sở văn hoá thông tin-thể thao Vinh Phúc.
- Nishimura, Masanari. 2005. Thành Lũng Khe: nhận xét mới từ nghiên cứu khảo cổ học. Hanoi. In *Một thế kỷ khảo cổ học Việt Nam tập 2*, pp. 47–71. Hà Nội: NXBKHXH.
- . (in press). Bronze Drums and Centralized Power with Special Reference to Co Loa and Lung Khe Citadels in the Early History of Vietnam. *Bulletin of the Indo-Pacific Prehistory Association*.
- Nông Trương. 1977. Tìm hiểu về người Pu Peo ở Hà Giang. *Nghiên Cứu Lịch Sử* số 88: 33–40.
- Parmentier, Henri. 1918 Anciens tambours de bronze. *BEFEO* 18: 1–30.
- . 1932 Notes d'archaeologie Indochinoise. *BEFEO* 32: 171–182.
- Phạm Đức Mạnh. 2005. *Trống đồng kiểu Đông Sơn (Heger I) ở miền Nam Việt Nam*. Ho Chi Minh: Nhà xuất bản đại học quốc gia.
- Phạm Huy Thông; Phạm Minh Huyền; and Nguyễn Văn Hào và Lại Văn Tới. 1990. *Dong Son drums in Viet Nam*. Hà Nội: NXBKHXH.
- Phạm Minh Huyền. 1982. Nghiên cứu nhóm hiện vật Cổ Loa bằng phương pháp quang phổ. In *Phát Hiện Cổ Loa 1982*. Hà Nội: Sở văn hoá thông tin Hà Nội.
- . 1982. Khai quật Làng Vạc (Nghệ Tĩnh) lần thứ hai (1980–1981). *NPH năm 1981*: 85–86.
- . 1997. Một trung tâm văn minh cổ đại đầu nguồn sông Hồng ở đất Việt. *KCH* số 1: 38–63.
- . 2001. Trống đồng ở Bảo tàng tỉnh Hà Giang. *KCH* số 4: 25–45.
- . (in press) Dong Son Drums Discovered in Vietnam from 1988 to 2005. *Bulletin of the Indo-Pacific Prehistory Association*.
- Phạm Minh Huyền; Nguyễn Văn Huyền; and Trịnh Sinh. 1987. *Trống đồng Đông Sơn*. Hà Nội: NXBKHXH.
- Phạm Quốc Quân. 1985. Suy nghĩ và những chiếc trống loại II Hêgô. *Thông báo khoa học* 3: 82–90.
- . 1993. Mộ mừng Kim Truy (Hoà Bình). *Thông Báo Khoa Học* 1992: 60–87.
- Quách Văn Aịch. 2003. *Trống đồng cổ ở Hoà Bình*. Hà Nội: Luận án tiến sĩ.
- Quáng Văn Cậy; Lưu Trần Tiêu; Hà Văn Thảng; Nguyễn Văn Huyền; Nguyễn Thành Trai; Đặng Cao Sâm; Hoàng Hoá Toàn; Lê Mai Châu; and Diệp Đình Hoa. 1974. Những trống Đông mới phát hiện: người Lô Lô với trống đồng. *KCH* số 16: 115–125.
- Sở văn hoá thông tin Hà Nội (SVHTTTHN), ed. 1983. *Phát hiện Cổ Loa*. Hà Nội: SVHTT.
- Tổng Trung Tín. 1997. *Nghệ thuật điêu khắc Việt Nam-thời Lý và thời Trần (thế kỷ XI-XIV)*. Hà Nội: NXBKHXH.
- Trần Hưu Sơn. 1993. Người Giay và trống đồng. *NPH năm 1992*: 109–111.
- Trần Phương. 1998. Trống đồng Mỹ Khê (Hải Phòng). *NPH năm 1997*: 228–229.
- Trần Quốc Vượng; and tập thể sinh viên chuyên ban khảo cổ. 1978. Cổ Loa mùa điện dã 1977. *NPH năm 1977*: 124–126.

- Trịnh Sinh. 2003. Casting Method, Classification and Dating of the Heger II Drums in Hoa Binh Province, Vietnam. *Journal of Southeast Asian Archaeology* 23: 59-67.
- Trịnh Sinh; and Nguyễn Anh Tuấn. 2001. Những chiếc trống đồng ở Phú Thọ. *KCH số 2*: 38-71.
- Trịnh Sinh; and Quách Văn Ấch. 2002. Phân loại và định niên đại trống đồng ở Hòa Bình. *KCH số 2*: 24-48.
- Viện bảo tàng Lịch sử Việt Nam (VBTL SVN). 1968. *Mộ cổ Việt Khe*. Hà Nội, Viện bảo tàng Lịch sử Việt Nam.
- . 1975. *Những trống đồng Đông Sơn đã phát hiện ở Việt Nam*. Hà Nội, Viện bảo tàng Lịch sử Việt Nam.
- Yoshikai, Masato. 2004. One Century of Bronze Drum Research in Japan. *Transactions of the International Conference of Eastern Studies* No. 49: 23-53.
- アバディ, モーリス. 1944. 『東京高地の未開民』民族学協会調査部 (訳). 東京: 三省堂.
- 張声震; 范宏貴; 栗冠昌; 覃聖敏; 莫家仁; 藍鴻恩 (編). 1997. 『壯族通史 中』北京: 民族出版社.
- 中国古代銅鼓研究会 (編). 1988. 『中国古代銅鼓』北京: 文物出版社.
- 陳明. 2005. 「試論文山石塞山型銅鼓及紋飾」『声震神州——文山銅鼓暨民族歴史文化国際学術研究会論文集』文山荘族苗族自治州文化局 (編), 45-51 ページ所収. 昆明: 雲南人民出版社.
- 吳華. 2005. 「西盟型銅鼓与雲南少数民族」『声震神州——文山銅鼓暨民族歴史文化国際学術研究会論文集』文山荘族苗族自治州文化局 (編), 184-192 ページ所収. 昆明: 雲南人民出版社.
- 市原常夫. 1989. 「銅鼓に関する貴州省地方志資料の検討」『考古学の世界』新人物往来社.
- 今村啓爾. 1973. 「古式銅鼓の変遷と起源」『考古学雑誌』59 (3): 35-62.
- . 1976. 「出光美術館所蔵の先I式銅鼓」『出光美術館館報』: 8-21.
- . 1992. 「ヘーガーI式銅鼓における2つの系統」『東京大学文学部考古学研究室紀要』11: 109-124.
- . 1996. 「東南アジアにおける銅鼓研究の役割」『考古学雑誌』82 (4): 93-108.
- 夏雲輝. 2005. 「試論文山董馬銅鼓の幾個特点」『声震神州——文山銅鼓暨民族歴史文化国際学術研究会論文集』文山荘族苗族自治州文化局 (編), 268-272 ページ所収. 昆明: 雲南人民出版社.
- 蔣廷瑜. 1999. 『古代銅鼓通論』北京: 紫禁城出版.
- 蔣禹平. 2005. 「浅析文山俚人与銅鼓的淵源關係」『声震神州——文山銅鼓暨民族歴史文化国際学術研究会論文集』文山荘族苗族自治州文化局 (編), 294-299 ページ所収. 昆明: 雲南人民出版社.
- 川島秀義. 2006. 「ラオスにおける銅鼓の分布とその関係」『東南アジアの都市と都城 II』東南アジア考古学会 (編), 73-80 ページ所収.
- 洪声. 1974. 「広西古代銅鼓研究」『考古学報』1期: 45-90.
- 黃展岳. 1993. 「論南越国出土青銅器」『銅鼓和青銅文化的新探索』中国古代銅鼓研究会 (編), 221-236 ページ所収. 広西民族出版社.
- 黃增慶. 1956. 「広西貴州漢木榔墓清理簡報」『考古通報』4期: 18-20.
- 広西壮族自治区文物工作隊. 1978a. 「平東銀山嶺戦国墓」『考古学報』4期.
- . 1978b. 「広西西林普駝銅鼓墓葬」『文物』9期: 43.
- 広西壮族自治区博物館. 1988. 『貴州羅泊湾漢墓』北京: 文物出版社.
- . 1991. 『広西銅鼓図録』北京: 文物出版社.
- 李德君; 陶学良; 藍鴻恩; 楊路塔; 祖岱年 (編). 1995. 『中華民族故事大系』第3巻. 上海: 上海文芸出版社.
- 麦英豪; 林華; 王文建. 1996. 「代表的遺物の紹介」『中国・南越王の至宝 前漢時代 広州の王朝文化』114-126 ページ所収. 毎日新聞社.
- 三上次男編. 1984. 『世界陶磁全集 16 南海編』小学館.
- 宮川禎一. 2000. 「施文技術からみた西盟型銅鼓の新古」『学叢』22号: 109-137.
- 桃木至朗. 1992. 「10-15世紀ベトナム国家の『南』と『西』」『東洋史研究』51 (3): 158-191.
- 森 浩一. 1981. 「銅鐸を歩く——銅鐸の性格とその問題点」『考古学ノート——失われた古代への旅』社会思想社.
- 西村昌也. 2001a. 「紅河デルタの城郭遺跡, Lũng Khê 城址をめぐる新認識と問題」『東南アジア——歴史と文化』No. 30: 46-71.
- . 2001b. 「ヴェトナム銅鼓の生産と使用をめぐるいくつかの問題——考古学的視点を中心にし

- て』『ベトナムの社会と文化』377-388.
- . 2006. 「平原とメコン・ドンナイ川平原の考古学的研究」東京大学大学院人文科学研究科提出学位論文.
- . 印刷中. 「北部ヴェトナム紅河平原域における紀元1世紀後半から2世紀の陶器に関する基礎資料と認識」『東亜考古論壇』3号. 忠清文化財研究院.
- 西村昌也; 西野範子. 2003. 『ヴェトナム紅河平原遺跡データ集』文部省科学研究費成果報告書.
- 西村昌也; 西野範子. n. d. 『ヴェトナム銅鼓資料データベース』
- 西村昌也; ファン・ミン・フエン. 2008. 「中部ヴェトナム・ビンディン省出土の銅鼓資料と文化的脈絡についての検討」『文化交渉学研究』1: 187-219.
- 新田栄治. 2000. 「メコン流域発見のヘーガーI式銅鼓」『メコン流域の文明化に関する考古学的研究』新田(編), 平成9年度~平成11年度文部省科学研究費補助金基礎研究A2研究成果報告書, 21-37ページ所収.
- 王林斌. 2005. 文山万家覇型銅鼓初探14-21『声震神州——文山銅鼓暨民族歴史文化国際学術研究会論文集』文山荘族苗族自治州文化局(編), 268-272ページ所収. 昆明: 雲南人民出版社.
- 大西和彦. 2001. 「ベトナムの龍」『アジア遊学——特集ドラゴン・ナーガ・龍』28号: 38-41.
- 桜井由躬雄. 1979. 「雑田問題の整理」『東南アジア研究』17(1): 3-57.
- 佐世俊久. 1999. 「ベトナム黎明前期における儒教の受容について」『広島東洋史学報』4号: 1-20.
- 俵 寛司. 1995. 「古式銅鼓の編年と分布」『日本中国考古学会会報』5: 70-106.
- 寺沢 薫. 1992a. 「銅鐸埋納論(上)」『古代学研究』44(5): 14-29.
- . 1992b. 「銅鐸埋納論(下)」『古代学研究』44(6): 20-34.
- 鳥居龍蔵. 1923. 「我が国の銅鐸は何民族が残したものか」『人類学雑誌』38(4): 137-152.
- 宇野公一郎. 1999. 「ムオン・ドンの系譜——ベトナム北部のムオン族の領主家の家譜の分析」『東京女子大学紀要論集』49(2): 137-198.
- 万輔彬; 房明恵; 韋冬平. 2003. 「越南東山銅鼓再認論と銅鼓分類新説」『広西民族学院学報』25(6): 1-25.
- 尹天. 1995. 「雲南河口発現一面銅鼓」『考古』8期: 760.
- 吉開将人. 1995. 「ドンソン系銅盃の研究」『考古学雑誌』80(3): 64-94.
- . 1996. 「副葬品が語るもの——東アジア世界のなかの南越文化」『中国・南越王の至宝 前漢時代 広州の王朝文化』138-142ページ所収. 毎日新聞社.
- . 1998. 「銅鼓再編の時代」『東洋文化』78: 199-218.
- . 1999. 「銅鼓に見る伝統の諸相——銅鐸との比較の前に」『季刊考古学』66: 40-45.
- . 2000. 「百越・南越・越南——南越印と銅鼓伝説(要旨)」『東南アジア考古学』20: 49-54.
- . 2002. 「歴史世界としての嶺南・北部ベトナム——その可能性と課題」『東南アジア——歴史と文化』31: 79-96.
- 喻如玉. 1995. 「西南中国少数民族の銅鼓習俗」『東南アジア考古学』15: 27-38.